

鳴上遺跡群 21

上
群

1 9 9 7

高槻市教育委員会

嶋上遺跡群 21



1. 空から見た櫛原南遺跡（南側から）



2. 櫛原南遺跡（96-2） 全景（北西側から）



3. 梶原南遺跡（96-2） 全景（東側から）



4. 梶原南遺跡（96-2） 全景（北側から）



5. 梶原南遺跡 大型倉庫群（南側から）



6. 梶原南遺跡 奈良時代の集落（東側から）



7. 木箋



8. 今城塚古墳（空中写真）

は　し　が　き

北摂山地と淀川にはさまれた三島平野は、連綿と続く歴史遺産が数多く存在いたします。とくに古代には都と太宰府をむすぶ山陽道、そして淀川の水運も発達するなかで東西交通の要衝として栄えてまいりました。

平成8年度の調査は、嶋上郡衙跡ではおもに周辺地域の調査を実施してまいりました。このなかで郡衙北西部において、律令期のさまざまな出土遺物のなかに凝灰岩製の板石がみられたことは、郡衙に隣接する芥川廃寺とのかかわりをしめす重要な資料の一つとなりました。

梶原南遺跡の調査では、奈良時代の大規模な掘立柱建物を検出しました。本遺跡でのこれまでの調査では木簡や帶金具などのほか、大型倉庫などの掘立柱建物群が計画的に配置された状況など、官的な性格をもった集落とかんがえられていました。今回検出した建物は、これらと一体となって整然と配置された状況がうかがえ、続日本紀に記載されながらもその位置が不明であった幻の大原駅の想定に大きく寄与した調査結果かと考えております。

今年度も昨年度に引き続いて2か年継続で実施してまいりました阪神・淡路大震災にともなう調査の概要と被災資料の整理状況の報告を併載しております。土器や埴輪などの資料はすべて被災前の姿に復元し終え、ふたたび歴史資料としてのかがやきをとりもどすことができました。

また、あらたに史跡今城塚古墳の測量調査を実施し、巨大古墳の精密な測量図を作成いたしました。その成果は本文を参照いただきたいと存じますが、今後の古墳研究に貴重な資料の提供にとどまらず、今城塚古墳の整備にむけての第一歩となるものと受けとめています。

最後に、本書をまとめるにあたり、ご教示やご協力いただいた多くの方々に、心から感謝申し上げます。

平成9年3月31日

高槻市立埋蔵文化財調査センター
所長　富成哲也

例　　言

1. 本書は、高槻市教育委員会が平成8年度国庫補助事業として計画、実施した高槻市所在の史跡・鶴上郡衙跡附寺跡周辺部及び市内遺跡の発掘調査事業（総額14,450,000円、阪神・淡路大震災の復旧・復興対策4,450,000円を含む）の概要報告書である。
2. 事業は、高槻市教育委員会の直営事業として実施し、大阪府教育委員会の助力を得て、平成8年5月15日着手、平成9年3月31日に終了した。
3. 調査は、高槻市立埋蔵文化財調査センターがおこなった。本書の執筆・図面作成・製図は、橋本久和・鐘ヶ江一朗・宮崎康雄・高橋公一・木曾広・川村雪絵がおこない、分担は文末に記した。遺構・遺物の写真撮影は清水良真が担当した。遺物整理については以下の各氏から援助をうけた。厚く感謝する。

相川ひとみ・井上明子・井上香恵子・大山加恵子・岡田千鶴・河島博子・清田悦子・木村さつき・佐藤喜久子・四方登志子・白銀良子・梅 靖代・新山知香江・西岡和江・八木美江（順不同・敬称略）
4. 調査の実施にあたり、以下に掲げる土地所有者の方々をはじめ、関係機関各位のご協力をいただいた。ここに記して感謝いたします。

岩本和夫・寺田隆彰・丸賀正晴・春日正彦・福田重昭・風呂本敬三・堺 永治・山田 肇・笠松克好・佐土原心一・井出 効・玉置陽一・吉川雅子・伊藤 彰・西田源太郎・谷本成司・坂本信一・坂本明夫・末波幸雄・井ノ木忠信・山本麻夫・中野直・中島常慶・後藤侃一郎・下地孝司・中長信一・山口伊須夫（順不同・敬称略）

目 次

I	嶋上郡衙跡	1
II	水室塚古墳	17
III	郡家本町遺跡	18
IV	郡家今城遺跡	20
V	中城遺跡	24
VI	宮之川原遺跡	26
VII	大藏司遺跡	28
VIII	高槻城跡	29
IX	安満遺跡	30
X	梶原寺跡	31
XI	梶原南遺跡	34
XII	阪神・淡路大震災被災遺物の復元	47
XIII	今城塚古墳測量調査	48
XIV	まとめ	50

No	遺跡名(地区)	調査地	面積(m ²)	申請者
1	嶋上郡衙跡(44-B)	郡家町346	231.40	岩本和敬
2	" (48-K)	川西町一丁目953-12	61.60	呂本好彰
3	" (84-B)	今城町164-27	107.60	笠原克隆
4	" (48-D)	川西町一丁目954-2	126.20	松田正心
5	" (85-1)	今城町187-12	62.70	佐土原正重
6	" (48-E)	川西町一丁目956-6+959-8	50.30	原田正永
7	" (48-G)	川西町一丁目956-10+959-12	58.00	福春正助
8	" (48-G)	川西町一丁目954-13	97.50	日界
9	" (67-N)	川西町一丁目1088-12	66.90	井出田
10	" (15-6+H)	郡家本町314-1-4+10,315-2の一部	1,593.80	井山
11	" (75-O)	郡家新町163-33	65.00	山本好篤
12	水室塚古墳(96-1)	水室町二丁目571-1	88.70	玉置陽一
13	郡家本町遺跡(96-1)	郡家町1566	1,198.20	吉川雅子
14	郡家今城遺跡(96-1)	水室町一丁目781-25	101.00	伊藤彰
15	" (96-2)	郡家新町60-4	117.10	西田源太郎
16	" (96-3)	水室町一丁目769-7+15	208.70	谷成司
17	中城遺跡(96-1)	北昭和町313-7	100.70	坂本信一
18	" (96-2)	北昭和町313-6	100.70	坂本信一
19	宮之川原遺跡(96-1)	宮之川原五丁目505-41	58.10	末波幸雄
20	" (96-2)	宮之川原五丁目505-31	87.30	井ノ本忠信
21	大藏司遺跡(96-1)	浦堂一丁目279-2の一部他	164.00	山本麻夫
22	高槻城跡(96-1)	出丸町970-1	125.10	中野直昇
23	" (96-2)	出丸町964-14	114.84	上野山
24	安満遺跡(96-1)	安満新町375-6	129.90	中島常慶
25	梶原寺跡(96-1)	梶原一丁目1137	893.50	畠山神社總代
26	梶原南遺跡(96-1)	梶原四丁目5-2	487.60	下地孝司
27	梶原南遺跡(96-2)	梶原四丁目664-1,669-2,1299	1,803.90	中長一

I 島上郡衙跡

1. 島上郡衙跡（44-B地区）の調査

調査地は高槻市郡家本町346にあたり、小字名は「林田」、現状は水田である。このたび個人住宅の建設工事が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。

当該地は島上郡衙の史跡指定地南西部に隣接する地区で、水田地帯として残るが、西側はこの数年間に住宅地として開発が進行している。周辺で実施されている発掘調査では奈良時代の柱穴などが一部に検出されているが、これまでのところ郡衙との関連を示すような建物などは知られていない。

調査は重機で耕作土と床土を除去し、以下は人力で掘削作業を実施した。基本的な層序は耕作土（0.2m）、床土（0.1m）、淡灰褐色土（0.2m）、灰色粘土（0.1m）と堆積し、地山は砂礫の混じる黄灰色土である。遺構は調査区の北西隅から東にむけて掘削された溝と調査区の南部で2基の土壙が検出された。

遺構・遺物（図版第2、図2）

溝1は幅3～3.5m、深さ約0.2mを測る。溝内には灰色砂が堆積し、南側の肩部は比較的明瞭に検出することができたが、北側は不明瞭である。溝の北側にも褐色砂や灰色砂が堆積し、流れが不安定であったことを示している。灰色砂から弥生土器や須恵器の破片が出土している。

土壙は床土を除去するとすぐに検出された。土壙1は長さ1.5m、幅1.2m、深さ0.4mを測る。内部には泥炭化した暗灰色粘土が堆積していた。土壙2はほぼ円形で、直径1.5m、深さ0.6mを測り、土壙1同様、暗灰色粘土が堆積していた。いずれも素掘りで出土遺物はまったく無い。枠などはみられなかったが、野井戸の可能性がかんがえられる。

今回の調査では溝を検出し、史跡指定地の南西部にも古墳時代の遺構のひろがっていることが確認された。しかし、砂礫の混じる地山面からは湧水も多く、竪穴住居や掘立柱建物などの居住空間としては不向きであったらしい。

（橋本）



図1. 島上郡衙跡調査位置図(1)

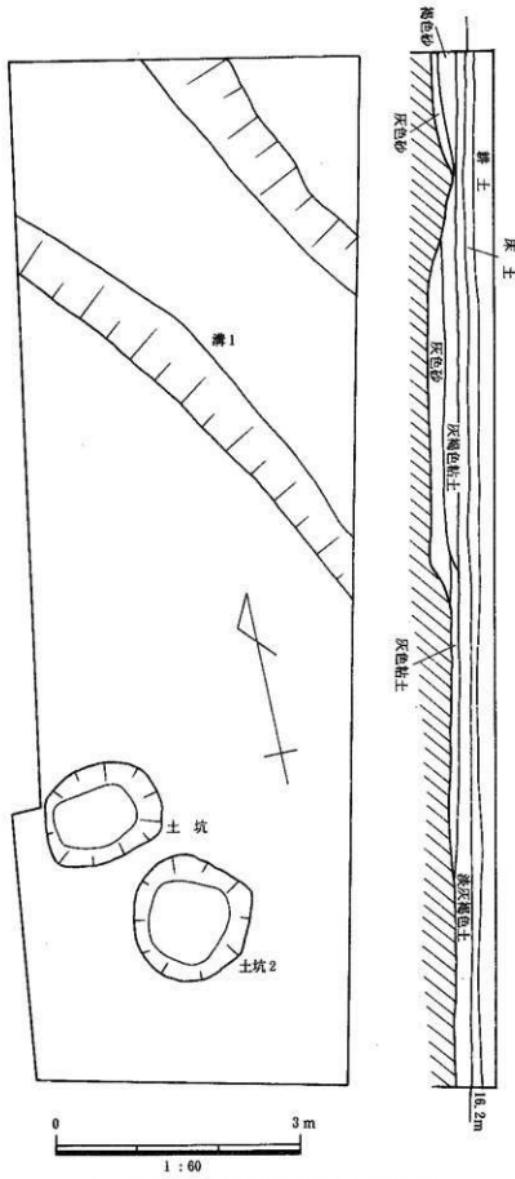


图2. 岭上郡街脉(44-B地区)平面图·断面图

2. 島上郡衙跡（48-K地区）の調査

調査地は高槻市川西町一丁目953-12にあたり、小字名は「川西北浦」である。現状は宅地である。今回、個人住宅建設工事に先立って発掘調査を実施した。

当該地は遺跡の南東辺にあたり、造構の希薄な地域に位置する。

基本的な層序は、盛土（1.1m）、耕作土（0.3m）、淡青褐色土〔客土〕（0.6m）、黒褐色粘土〔遺物包含層〕（0.6m）で、その下層は灰色砂質土の地山となる。黒褐色粘土層からは弥生土器の小片が出土したが、造構は確認していない。
(高橋)



- 2. 48-K地区
- 4. 48-D地区
- 6. 48-F地区
- 7. 48-G地区
- 8. 48-G地区

図3. 島上郡衙跡調査位置図(2)

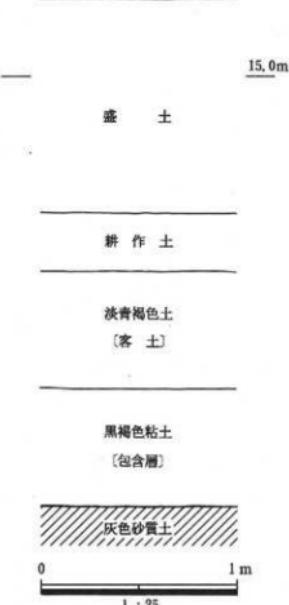


図4. 48-K地区土層模式図

3. 島上郡衙跡（84-B地区）の調査

調査地は高槻市今城町164-27にあたり、小字名は「中久保」、現状は宅地である。このたび個人住宅の建設工事が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。

当該地は鳴上郡衙跡の南西部で、遺構の希薄な地域である。盛土を重機で除去し、調査を実施した。層序は盛土(0.3m)、床土(0.1m)、黄灰色粘土(0.3m)と堆積し、地山は青緑色砂質粘土である。遺構・遺物はまったく検出されず、遺構の広がりは確認できなかった。また、遺物包含層に相当する層も確認できなかった。

(橋本)

4. 鳴上郡衙跡(48-D地区)の調査

調査地は高槻市川西町一丁目954-2にあたり、小字名は「川西北浦」、現状は宅地である。このたび個人住宅の建設工事が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。

当該地は川西小学校東側の住宅地で、史跡指定地東部に隣接する。個人住宅などの建設に先立つ発掘調査がもっとも多い地区であるが、これまでの調査では弥生時代から古墳時代にかけての方形周溝墓や堅穴住居跡をはじめ、遺構・遺物が数多く検出されている。

届出地中央部に調査壙を設定し、層序の観察と遺構・遺物の確認作業を実施した。層序は盛土(1.2m)、耕作土(0.1m)、青灰色砂(0.1m)、黄灰色粘土(0.2m)、淡褐色土(0.3m)、暗褐色土(0.3m)と堆積し、地山は礫の混じる黄褐色土である。この層序は基本的に周辺部での調査と同様で、暗褐色土が遺物包含層であるが、弥生土器の小片が少量出土しただけである。また、地山面を精査したが遺構は検出されなかった。

今回の調査は小範囲であり、明確な遺構・遺物は検出できなかったが、遺物包含層の広がりを確認することができた。また、青灰色砂の堆積など芥川の氾濫を示すような兆候もみられた。

(橋本)

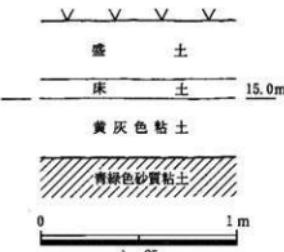


図5. 84-B地区土層模式図



図6. 48-D地区土層模式図

5. 島上郡衙跡（85-I 地区）の調査

調査地は高槻市今城町187-12あたり、小字名は「中久保」、現状は宅地である。このたび個人住宅の建設工事が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。



図7. 島上郡衙跡調査位置図(3)

当該地は島上郡衙跡の南西部で、遺構の希薄な地域である。調査は届出地中央部の盛土を重機で除去し層序の観察と遺構・遺物の検出作業を実施した。層序は盛土（0.4m）、床土（0.2m）、黄灰色粘土（0.4m）と堆積し、地山は青緑色砂質粘土である。遺構・遺物はまったく検出されず、遺構の広がりは確認できなかった。
(橋本)

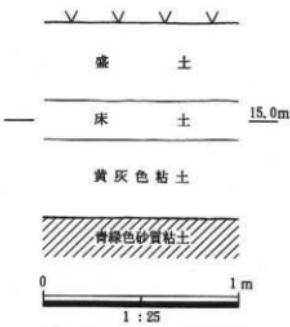


図8. 85-I 地区土層模式図

6. 島上郡衙跡（48-F 地区）の調査

高槻市川西町一丁目956-6、959-8 にあたり、小字名は「川西北浦」と称する。現状は宅地であり、今回個人住宅建築工事が計画されたため、事前に調査を実施した。

調査は、届出地の東寄りに調査坑を設定し、重機で盛土・耕作土を除去したのち、人力で掘削して精査した。基本層序は、盛土（1.45m）、耕作土（0.15m）、床土（0.1m）、青灰色粘質土（0.15m）、青灰色砂質土（0.1m）、黒褐色土（0.15m）〔遺物包含層〕、暗茶褐色土（0.25m）〔遺物包含層〕、茶褐色土〔地山〕である。地山面の標高は約13.2mをかる。

遺物包含層は土質・色調から2層に分けられたが、いずれも摩耗・風化が著しい土器細片がわずかに出土したのみで、時期は不明である。遺構はまったく検出されなかった。（鐘ヶ江）



15.0m

盛 土



14.5m

盛 土

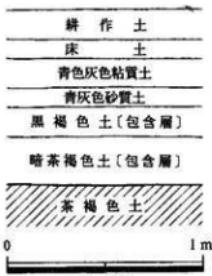


図9. 48-F地区土層模式図

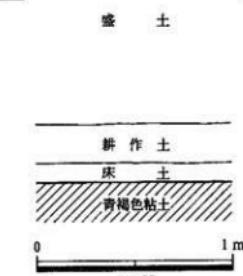


図10. 48-G地区土層模式図

7. 島上郡衙跡（48-G地区）の調査

高槻市川西町1丁目956-10、959-12他にあたり、小字名は「川西北浦」と称する。現状は宅地である。

このたび、個人住宅新築工事の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、事前に調査を行った。今回の調査地は史跡島上郡衙跡指定地東側の住宅街にあたり、これまでの周囲の調査では方形周溝墓をはじめとする弥生時代の遺構や遺物が多数検出されている。

調査は届出地中央部を小型ユンボで盛土等を除去し、層序を観察しながら人力で掘削した。基本層序は、盛土（1~1.05m）、耕作土（0.2m）、床土（0.1m）、青褐色粘土〔地山〕であった。遺構・遺物は検出できなかった。
(木曾)

8. 島上郡衙跡（48-G地区）の調査

高槻市川西町1丁目954-13にあたり、小字名は川西北浦と称する。現状は宅地である。今回個人住宅新築工事が計画されたため、事前に調査を実施した。届出地は、史跡島上郡衙跡附寺跡の東方に位置する。周辺では、郡衙関連の遺構は希薄であるものの、これまでに西側及び北側では弥生時代の周溝墓群等を検出している。

調査は、届出地の西寄りに調査坑を設定し、重機で盛土・耕作土を除去した後、人力で掘削して精査した。基本層序は、盛土（0.95m）、耕作土（0.2m）、灰褐色砂質粘土（0.3m）、黄褐色粘質土（0.05m）、暗青灰色砂質土（0.25m）、淡茶褐色粘質土（0.2m）、黒褐色土（0.2m）〔遺物包含層〕、石混じり茶褐色土〔地山〕である。地山面の標高は約13.3mをはかる。

遺物包含層中から弥生時代後期の土器片が少量出土したが、遺構を検出するには至らなかった。
(鐘ヶ江)

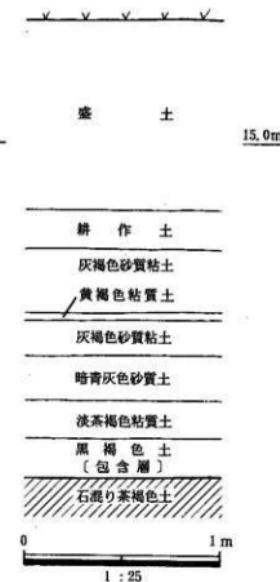


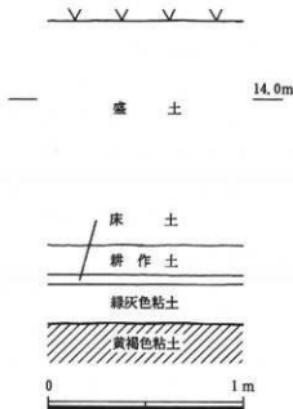
図11. 48-G地区土層模式図

9. 嶋上郡衙跡（67-N地区）の調査

調査地は高槻市川西町一丁目1088-12にあたり、小字は「川西北浦」である。現状は宅地である。

このたび、個人住宅新築工事が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。今回の調査地は史跡指定地の東側に位置し、周辺の調査では弥生時代～古墳時代を中心とした遺構・遺物を検出している。

調査は、届出地の中央にトレンチを設定し、重機を用いて盛土・整地土等を除去した後、人力によって遺構・遺物の検出につとめた。層序は盛土（1.15m）、旧耕作土（0.15m）、床土（0.05m）、緑灰色粘土（0.25m）、黄褐色砂質粘土（地山）である。芥川に近接するためか、遺構・遺物はまったく検出されなかった。
(宮崎)



10. 嶋上郡衙跡（15-G・H地区）の調査

調査地は、郡家本町314-1ほかにあたり、小字名は東馬場と称する。現状は水田である。

このたび、給油所建設工事の目的で土木工事とともにう发掘届が提出されたため、事前に発掘調査を実施した。当該地は南平台丘陵の裾部にある郡家本町の集落の南側に広がる水田の一画にあたり、府道をはさんで、南側一帯は史跡嶋上郡衙跡附寺跡の指定地になっている。周辺のこれまでの調査では、弥生時代から中世にかけての遺構・遺物が発見されている。

遺構(図版第3~7、図15)

調査は届出地の南北に2ヶ所の調査区を設定し、それぞれA区(東西38m、南北17m)、B区(東西9.0m、南北4.0m)とした。

A区は重機で耕土(0.2m)、床土(0.2m)を除去すると暗褐色土(0.32~0.7m)の遺物包含層が分厚く堆積していた。これを除去すると、遺構面(暗黄褐色土)となり、その後人力で遺構の検出作業をおこなった。検出した遺構は竪穴住居跡1基、掘立柱建物跡2棟、土壙墓1基のほか、落ち込み・溝状遺構・ピット等が調査区全体に広がっていた。

住居1は調査区中央部で検出した。一辺の長さが6mを測る方形のもので、壁面の高さは0.25mを測り、周溝は幅0.1~0.3m、深さ0.08~0.14mである。カマド・主柱穴は検出できなかった。埋土は暗褐色土層で、中央部付近から小形壺などが出土している。

建物1は調査区南側で検出した。桁行3間(柱間2.4m)、梁行2間(柱間1.8m)で、それぞれの柱穴は0.65m~0.9m、深さ0.37~0.64mの方形に整然と掘削されている。部分的に形がややいびつとなっているのは地山に拳大の石が数多く混在しているためであろう。建物の主軸方位はN-14°-Wである。

建物2は調査区の北隅部で検出した。桁行5間(柱間1.8m)、梁行3間(柱間1.8m)の南北棟で、北半分は調査区外にのびる。柱穴は0.6m~0.9m前後の隅丸方形で、深さは0.15m~0.61mを測る。建物の主軸方位はN-14°-Wである。

土壙墓1は橢円形を呈し、長径1.5m、短径1.0mを測り、深さは0.16mと浅い。土壙墓内から土師皿34枚と中国製白磁碗の破片が出土している。

落ち込み1は方形を呈し、長辺4.0m、短辺2.4m、深さ0.45~0.63mを測る。土師器・須恵器・瓦・石製品等が多数出土している。

落ち込み2は調査区南端に位置し、さらに南へ広がる。平面は不整形な方形をなし、長辺10.0m、短辺3.4m以上で、深さ0.22~0.6mを測る。土師器・須恵器の杯・蓋・壺・甕が多数出土している。

B区は重機で上層より盛土(1.05~1.4m)、黒灰褐色砂(0.2~0.3m)、青灰色砂(0.12~0.2m)、暗褐色粘質礫土(0.25~0.3m)と順次掘削し、その後人力で遺構面(暗黄褐色粘土)まで掘り下げる。

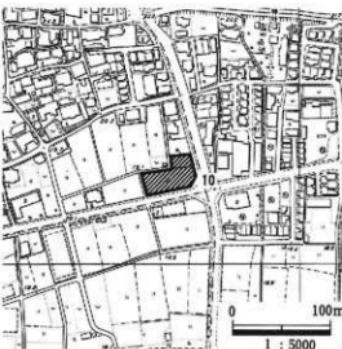


図14. 嶋上郡衝跡調査位置図(5)

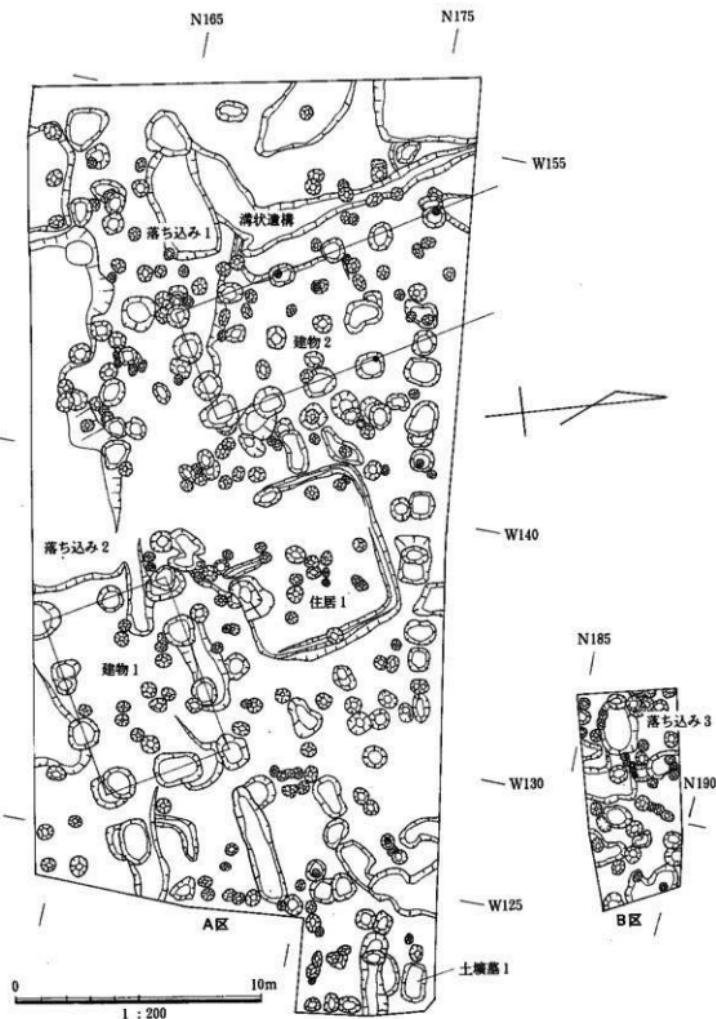


図15. 15-G・H地区 平面図

B区で検出した遺構は若干のピットと落ち込みである。ピットは調査区全体に広がっている。いずれも円形を呈し、直径0.1~0.6m、深さ0.07~0.34mを測る。

落ち込み3は調査区西南端で検出した。長径2.4m、短径1.4mの椭円形を呈し、深さ0.32mを測る。

遺物(図版第8~13、図16~18)

今回の調査では、住居跡・落ち込み・土壌墓・溝状遺構・ピット・包含層などから多数の遺物が出土し、総数はコンテナ40箱を数える。今回はこれらの遺物の中から主要なものについて報告する。

住居1からは、土師器(1・2)が出土した。1は小形丸底壺で、復原口径8.0cm、現存高5.5cmをはかる。体部外面にハケ目が残っている。色調は淡灰褐色を呈す。小形丸底壺(2)は、口径6.1cm、体部径12.1cm、器高4.9cmを測る。口頭部はナデ調整、体部は風化のため調整不明。色調は淡灰褐色を呈す。

落ち込み1からは土師器・須恵器をはじめとする遺物(3~22)が出土した。3~10は土師器で、そのうち3~8は碗類である。3は口径10.0cm、器高3.6cmを測る。口縁端部はヨコナデ調整し、内面に正放射暗文を施す。色調はぶい橙色を呈している。4は口径16.2cm、器高6.1cmで、内面に正放射暗文を施す。色調は浅黄橙褐色を呈している。5は口径16.6cm、器高5.2cmで、外側は風化により調整不明、内面には正放射暗文が残っている。色調は橙褐色を呈している。6は口径10.5cm、器高3.3cmで、外側はナデ調整し、内面には正放射暗文が残っている。色調は橙褐色を呈している。7は口径14.4cm、器高4.9cmで、色調は橙褐色を呈している。8は口径14.6cm、器高7.0cmで、色調はぶい橙色を呈している。9は小型壺の上半部で、口縁部外側はナデ調整、体部外側はタテ方向にハケ調整している。外側はナデ調整、口縁部内面はハケ調整し、色調は橙褐色を呈している。10は高杯で、口径15.4cm、器高10.4cm、體部径9.6cmを測る。皿状の杯部に裾がゆるやかにひろがる脚部がつく。杯部内面は口縁端部をヨコナデし、底部に螺旋暗文を、口縁部には斜放射暗文を施している。脚部外側はナデ調整で、内面には指圧痕がある。色調は橙褐色を呈している。

11~19は須恵器で、そのうち11~15は杯蓋である。11~14は口径8.2~12.5cm、器高3.3~4.0cmを測る小振りのものである。内外面とも回転ナデ調整で仕上げ、色調はおおむね青灰色ないし灰白色である。15は直径10.0cm、器高3.4cmで、天井部に宝珠つまみがつく。外側は回転ヘラ削り調整、内面はナデ調整し、色調は青灰色を呈している。16は短頸壺で、口径10.1cm、最大腹径18.9cm、器高18.6cmを測る。外側は体部の上半を回転ナデ調整し、下半分は回転ヘラ削り調整している。内面はナデ調整である。色調は灰白色を呈している。17は壺で、口径20.4cm、最大腹径38.1cm、復元高40.0cm、やや縦長の球形部の体部に短くひらく口頭部が

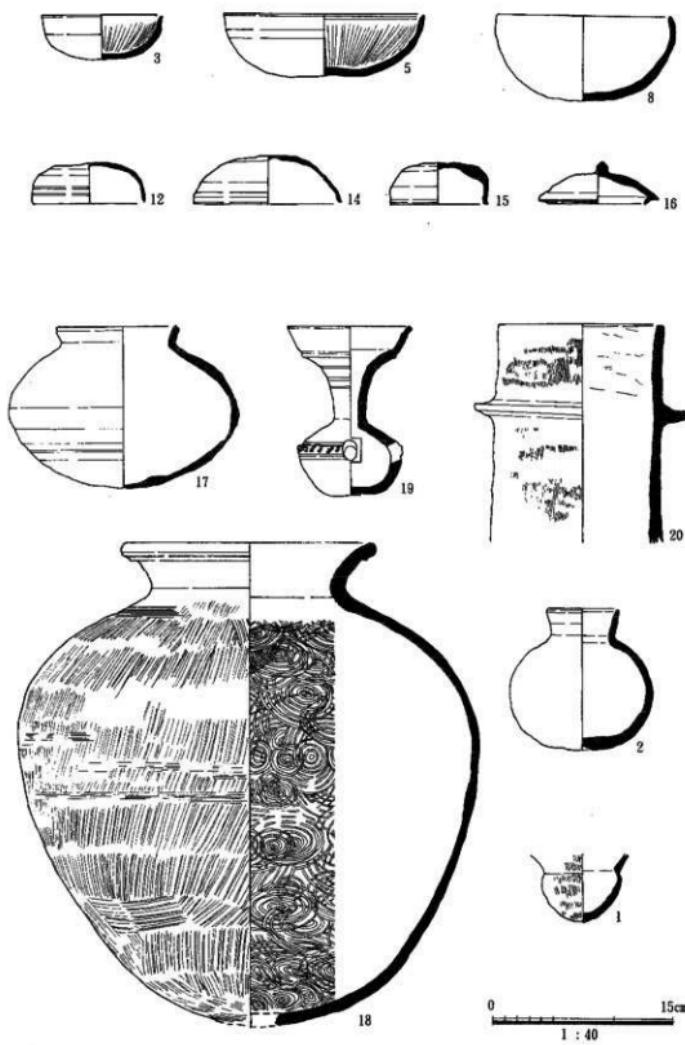


図16. 15-G・H地区 造物実測図 住居1(1・2) 落ち込み1(3・5・8・12・14~20)

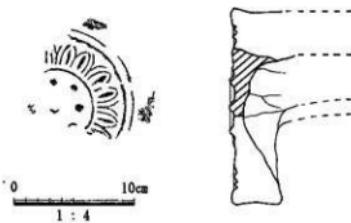


図17. 15-G・H地区 軒丸瓦 包含層 (36)

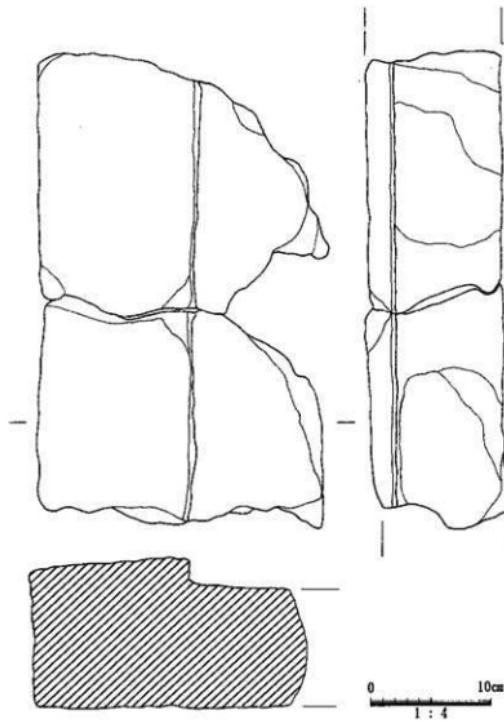


図18. 15-G・H地区 板状石製品 落ち込み1 (21)

つく。最大腹径は体部上位にある。外面は平行タタキのあと、カキメ調整が施され、内面には同心円状のあて具痕を残す。口縁端部内面に×印のヘラ記号がある。色調は淡灰色を呈している。18は高杯の脚の裾部片である。スカシ孔は3方向と思われる。色調は暗青灰色を呈している。19は底で、口径10.5cm、器高13.9cmを測る。やや肩の張る球形の体部と大きく2段にひらくラッパ状の口頭部をもつ。体部は2条の沈線と列点紋で装飾されており、中央にやや上向きの円孔があけられている。色調は淡灰色を呈している。

20は筒形土製品で、下半を欠失している。口径13.8cm、現存高18.0cmを測る。外面はタテハケ調整で、口縁上端部から7.1cm下方に鰐状の凸帯が巡り、全体をナデ調整している。筒部内面はナデ調整している。

21は板状の石製品で、2つの塊が接合したものである。全体の破損が著しいために全長や全幅は不明で現存する長さは35.0cm、幅23.0cmで、重さ9.0Kgを測る。板石の片面側の端部に、幅13cm、高さ2cmの削り出した長方形のサオ状の段がある。また一方の面は平坦に仕上げられている。厚みは平坦部で9.5cm、段状部で11.0cmを測る。段のある面には一部側面にかけて火を受けた痕跡があり、当該面が使用時には表面になっていたと考えられる。石材はごく少量の礫を含む凝灰岩で、色調は白灰色を呈している。

22は鉄滓である。直径約4cmのかたまりで、同様のものをこのほかにも2個検出している。土壤基1からは白磁片(23・24)が出土した。ともに中国製のもので、口縁部の破片である。色調は白灰色を呈している。時期的には12世紀と考えられる。そのほかに口径8.5cm前後の土師皿34枚がまとめて出土している。

溝状遺構からは製塙土器などが出土している。25は弥生時代後期の有孔鉢の底部片である。外面はタタキ成形し、底に0.6cmの孔を穿つ。色調は橙褐色を呈している。26は製塙土器で、外面は粗くナデ調整し、内面は細かい布目痕がある。色調は暗橙色を呈している。27は高杯脚部の破片で、外面は八角形に面取りをしている。色調は橙色を呈している。28は道具瓦と思われる。一端が屈曲しており、厚みは2~3cmある。表面はていねいにナデ調整し、内面は粗く調整している。色調は灰白色を呈す。29は丸瓦で長さ27.6cm、厚さ2.0cmで、凸面はナデ調整し、凹面は布目痕がある。色調は青灰色を呈している。

ピット10からは製塙土器(30)が出土している。長胴形の粗製製塙土器で、口径16.5cmを測る。色調は褐色を呈している。またピット27からは有孔土錠(31)が出土している。現存長は4.0cm、直径1.4cmあり、一端に径0.7cmの貫通孔がある。

包含層から特記すべき遺物が若干出土している。32は東海系のS字状口縁台付壺の底部片で、外面は粗くハケ調整し、内面はナデ調整している。脚台下半は欠失している。胎土には砂粒を多く含み、搬入品と考えられる。33は壺の口縁部で、外面はヨコナデ、内面はヘラケズリ調整

している。布留式古相のもので、色調は暗赤褐色である。34は台付壺の体部片とみられる。外側はハケ調整後、帯状のヨコハケ調整している。内面はナデ調整している。32と同様、搬入品とみられる。35は須恵質の筒形土製品で、現存高は42.0cmを測る。最大径は38.0cm、厚さ1.5cmあり、上方がラッパ状に広がりをみせている。体部外側は縦方向にハケ調整し、内面はナデ調整が認められる。色調は灰白色を呈し、焼成はきわめて良好である。器形および使途については判然としない。36は軒丸瓦で、瓦当文は内区に16弁の複弁蓮華紋を配し、中房は1+8の蓮子をもつ。外区内縁は二重圓線で、外縁は線鋸齒文とみられる。瓦当部直径は16cmを測る。瓦当部内面は指でなでて整形した跡がある。この瓦は平城宮6225型式の系統をひくものであろう。37・38は丸瓦で、凹面はナデ調整し、凸面には布目痕がある。39~43は平瓦で、長さは不明だが、厚さ2cmを測る。凹面は繩目があり、指で押された跡がある。凸面は布目痕があり、その周辺をなでる。色調は共に青灰色を呈する。

落ち込み2からは、土師器や須恵器の杯・蓋・皿・高杯・壺・壺の破片などが出土している。

B区の遺物は、包含層から出土した。土師器や須恵器の杯・皿・壺があるもの、いずれも細片ばかりで復元できるものは少ない。

小 結

今回の調査では、古墳時代の住居跡や2棟の掘立柱建物を検出した。住居跡は布留期とみられ、これまでの調査結果とあわせて、調査区の周辺に広がる集落の一画にあたるものと考えられる。掘立柱建物については、規模も大きく、方位をそろえるなど、計画的に配置されたと考える。時期は明確でないものの、N-14°-Wの方位からすれば、7世紀中頃の所産とみられる。

今回出土した遺物の中で、特に注目されるものに複弁蓮華紋軒丸瓦と凝灰岩製板石がある。複弁蓮華紋丸瓦は平城宮6225形式の系統をひく軒丸瓦で、嶋上郡衙跡はもとより、三島でも初めて出土したものである。また凝灰岩製板石は、寺院等の基壇に使用する石材の一部とおもわれるが、落ち込み1で伴出した土器がおおむね7世紀前半代と考えられることから、近くにある7世紀後半に創建された芥川廃寺のものとみるには、結論が留保される。その他の豪族居館に関連する石材かも知れない。いずれにしても、今後の調査をまって、判断すべきものであろう。

(木曾)

11. 鳴上郡衙跡（75-O地区）の調査

調査地は高槻市郡家新町163-33にあたり、小字名は「宛本」、現状は宅地である。このたび個人住宅の建設工事が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。

鳴上郡衙跡の南西部にあたり、これまでの調査では遺構が比較的希薄な地域である。しかし、当調査区北側で昨年度に実施した例では方形の柱穴などが検出されている。

調査は届出地中央部に調査壇を設定し、盛土を重機で除去し、層序の観察と遺構・遺物の検出作業を実施した。層序は盛土（0.4m）、灰色粘土（0.35m）と堆積し、地山は青緑色砂質粘土である。遺構・遺物はまったく検出されず、遺構の広がりを確認することはできなかった。また、当調査区では耕作土や床土がみられず、灰色粘土には材木等が混じっていた。周辺の調査例からみて、当調査区周辺は湿润であり、宅地造成時に耕作土などを削平したあと、埋め立てられたことを示している。

（橋本）

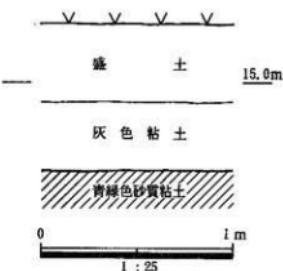


図19. 75-O地区土層模式図

II 氷室塚古墳

12. 氷室塚古墳（96-1）の調査

高槻市氷室町2丁目571-1において、個人住宅建設工事が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。当該地は遺跡の北側にあたる。ここには昭和30年代まで池があり、この池が古墳を巡る周溝の名残りと推定されていた。現状は宅地で、小字名は「塚後」である。

基本的な層序は、盛土（0.5m）、青褐色砂質土（0.6m）【埋め立て土】、黒灰色粘質土（0.1m）、青灰色砂（0.05m）で、礫混じりの暗灰色土の地山となる。黒灰色粘質土には多量の植物質を含んでおり、青灰色砂とともに池の堆積層と思われる。しかし、これらの土層から埴輪等の古墳に関係する遺物は出土しなかった。

（高橋）

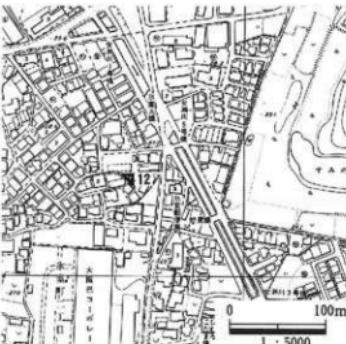


図20. 氷室塚古墳調査位置図

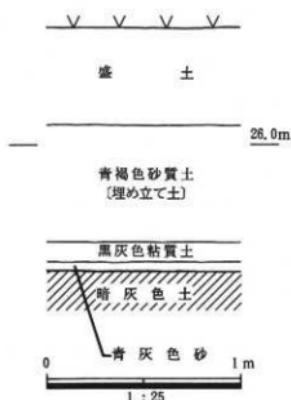


図21. 氷室塚古墳（96-1）土層模式図

III 郡家本町遺跡

13. 郡家本町遺跡（96-1）の調査

郡家本町遺跡は、南平台丘陵の南端に位置する弥生時代から中世にかけての複合遺跡で、周辺には弁天山古墳群・史跡嶋上郡衙跡などの著名な遺跡が展開する。当該調査区に隣接地で実施されたこれまでの調査では、芥川廃寺跡に瓦を供給した窯や嶋上郡衙跡との関連が指摘されている大規模建物のほか、東隣接地区では弥生時代後期堅穴住居5棟などが重複した状態で検出されている（「郡家本町遺跡」『平成5年度文化財年報』）。また西隣の調査区では平成4年度に多角形住居を1棟検出している（「郡家本町遺跡」『平成4年度文化財年報』）。

当該地は高槻市郡家本町1566番地にあたり、小字名は「西上野」と称する。調査は、まず重機で掘削した後、人力で掘り下げる。調査区の標高は北端で29.13m、南端は29.33mを測り、北から南に緩やかに傾斜している。

層序は暗茶褐色土(0.2~0.3m)、灰白色疊土(0.5~0.6m)、明灰色土(0.1~0.3m)、茶褐色土(0.12~0.24m)、黄褐色土(0.02~0.3m)、暗黄色砂質土(0.08~0.1m)、暗褐色粘土(0.1~0.4m)であった。



図22. 郡家本町遺跡調査位置図

遺構（図版第13a、図23）

今回の調査では柱穴・落ち込み・溝状遺構を検出した。

柱穴は調査区南端で散在するものの建物としてまとめるには至らなかった。いずれも直径0.4~0.7mの円形で、深さ0.1~0.23mをはかる。

落ち込み1は調査区北端で検出した。一边約3.4mの矩形ないし不整円形を呈し、西側は調査区外に広がる。深さは0.11~0.16mと浅い。埋土は暗褐色粘土である。

溝状遺構1は東西にのびる浅いもので、両端は調査区外に続く。幅2.9m、深さ0.05~0.1mをはかる。埋土は暗褐色粘土である。

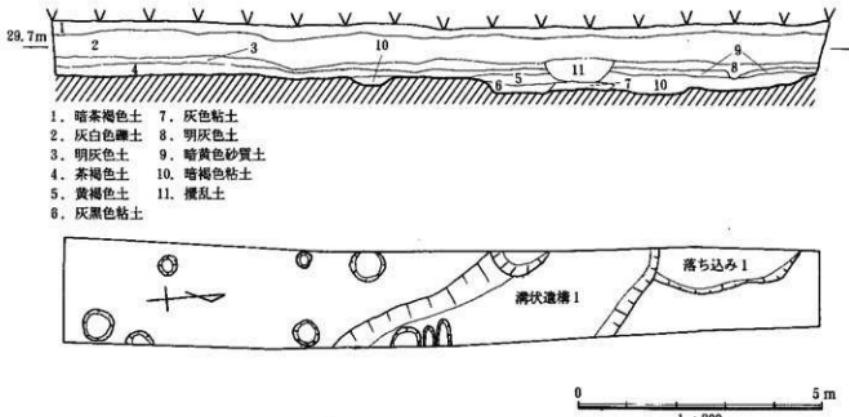


図23. 郡家本町遺跡 平面図・断面図

遺物(図版第13b)

遺物は包含層から出土した少數の土器類がある。弥生土器(1~3)、土師器(4~6)、須恵器(7~8)、瓦(9)などがあり、いずれも細片となっているために、完形に復原できるものはない。平瓦(9)は、淡灰色を呈する軟質のもので、平安時代の所産と考えられる。近くではすぐ南側にある芥川廃寺瓦窯のものに似ている。

小結

今回の調査では、弥生~奈良・平安時代の遺構や遺物を検出したものの、調査区の東が谷地形となっているためか竪穴住居や掘立柱建物などの遺構は検出されなかった。しかしながら、当該地までは集落の範囲が及ぶことが明確となった。今後周辺部の調査が進めば郡家本町遺跡西部の状況や南接する芥川廃寺瓦窯との関係等も明らかになると思われる。 (木曾)

IV 郡家今城遺跡

14. 郡家今城遺跡（96-1）の調査

高槻市水室町一丁目781-25にあたり、小字名は「下河原」と称する。現状は宅地である。

このたび、個人住宅の建替え工事が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。当該地は遺跡の縁辺部にあたり、遺構の希薄な地域である。

調査は届出地中央部に調査区を設定し、重機で盛土等を除去し、その後人力で壁断面を精査し、層序の観察と遺構の確認をおこなった。基本層序は盛土（0.8m）、耕作土（0.2m）、床土（0.05m）、青褐色粘土（地山）であった。遺構・遺物等は検出しなかった。（木曾）



図24. 郡家今城遺跡調査位置図(1)

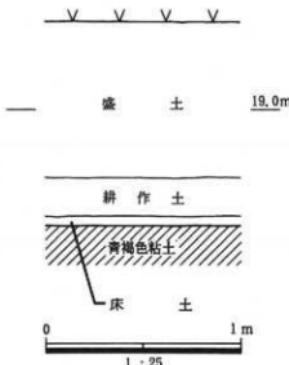


図25. 郡家今城遺跡（96-1）土層模式図

15. 郡家今城遺跡（96-2）の調査

高槻市郡家新町60-4において、公民館建設工事が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。

当該地の南西側では、古墳時代初頭頃の土壙墓群が検出されており（「22. 郡家今城遺跡（95-1）の調査」『鳴上遺跡群20』1996、「6. 郡家今城遺跡（92-1）の調査』『鳴上遺跡群17』1993、「郡家今城遺跡」『昭和47・48年度高槻市文化財年報』）、今回の調査ではこれらの土壙墓群の東限あるいは北限が明らかになるものと期待された。現状は宅地で、小字名は茶屋之前である。なお、当該調査区（便宜上A区とする）の北側に隣接する地域でおこなわれた調査の結果（B区）もあわせて報告する。

遺構・遺物（図版第14、図26）

基本的な層序は盛土（0.25m）、耕作土・床土（0.2m）で、淡黄灰色粘土の地山となる。地山面の標高は17.6mである。

検出した遺構は、溝2条、土壙墓3基、ピット等である。

溝1はA区の中央をはしる、幅0.8m、深さ0.2mの東西溝である。護岸のための杭も検出し、埋土にも砂質を多く含み、さらに陶磁器類の破片が出土しているところから、近代の水路と思われる。

溝2は溝1に重複して検出した。南側の肩



図26. 郡家今城遺跡調査位置図(2)

を溝1に切られているが、幅約0.9mに復元できる。深さは0.2mである。埋土は黄灰色粘質土で遺物は出土していない。

土壙墓1は、A区東南隅で検出した。南辺と東辺が調査区外であるが、直径1.2メートル程の不定円形に復元できる。深さは0.4m、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は大きく上・下層に分かれる。下層は黄灰色粘土ブロック土で非常にやわらかい。上層は暗灰褐色粘質土でややしまった土である。弥生土器の破片が少量出土した。

土壙墓2は、土壙墓1の西で検出した。一部が調査区外だが、長径1.1m、短径0.8mの楕円形の土壙墓とみられる。壁面はほぼ垂直、埋土は下層に黄灰色粘土ブロック土、上層に暗灰褐色粘質土がみられ、黄灰色粘土ブロック土からは土器が出土している。出土した土器はいずれも遺存状況が悪く詳細は不明だが、庄内式～布留式（古相）併行期の甕の破片とみられる。

土壙墓3は土壙墓1の北で、溝1及び溝2に切られた状態で検出した。長辺1.45m、短辺1.2mの隅丸方形の土壙墓である。やや掘り鉢状を呈し、深さは0.5mを測る。埋土は黄灰色粘土ブロック土である。遺物は出土していない。

B区では性格の不明な小規模のピットを4基検出したのみである。遺物は全く出土していない。

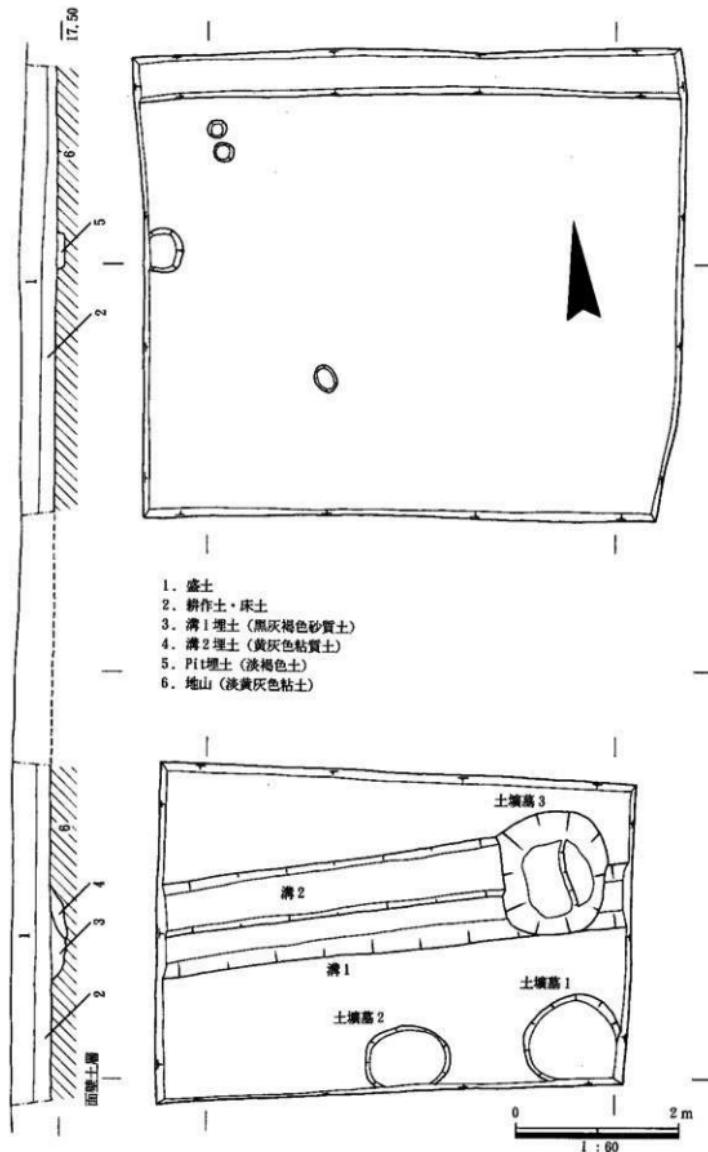


图27. 郡家今城遺跡(96-2) 造構平面図・土層図

小 結

今回の調査によって、南側に位置するA区のみで土壤墓を検出したことから、当該地が土壤墓群の北限とすることが可能となった。一方東限については、土壤墓の検出が調査区の東側に偏っていることから、さらに東側に広がる可能性もあり、現時点では確定できない。今後の周辺の調査に期待したい。

(高橋)

16. 郡家今城遺跡（96-3）の調査

高槻市氷室町1丁目769-7・15にあたり、
小字名は「下河原」である。現状は宅地である。

このたび、個人住宅建設工事が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。

調査地は、本遺跡の西端に位置し、遺構の分布が希薄な地域にあたる。調査地は全体に厚い盛土に覆われているために重機で盛土を除去したのち人力で掘削して調査を行った。

基本的層序は盛土（0.8m）、耕作土（0.2m）、床土（0.1m）、灰青褐色粘土（地山）であった。遺構・遺物は検出しなかった。

(木曾)

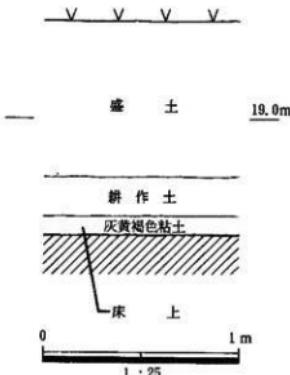


図28. 郡家今城遺跡（96-3）土層模式図

V 中城遺跡



図29. 中城遺跡調査位置図
17. 96-1 地区
18. 96-2 地区

17. 中城遺跡（96-1）の調査

調査地は北昭和台町303-7にあたり、小字名は「射場之前」、現状は宅地である。このたび個人住宅の建設工事が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。

昨年度、当調査区の隣接地では住宅建設工事中に約6000枚の中世の古銭が出土している。その際、明確な遺物包含層などは確認されていない。このため、周辺部の状況を把握する必要もあり、届出地の南側に調査 sond を設定した。

約0.4mの盛土はすでに除去されていたため、耕作土以下を人力で掘削した。層序は耕作土(0.1m)、褐色土(0.1m)、淡褐色土(0.15m)、暗褐色土(0.6m)で、地山は礫を含む黄褐色土である。褐色土に土師器の細片がわずかに包含されているだけで、造構は確認されなかった。

昨年、古銭の出土した地点では、褐色土など明瞭な遺物包含層は認められず、地山面は



図30. 中城遺跡（96-1）土層模式図

今回の調査で確認された地山より約0.5m高い位置にある。このため、古銭の出土地点から今回の調査地点に向けて地山面が傾斜していることを確認した。明確な遺構は確認されなかつたが、周囲に中世集落が存在するものと思われる。

(橋本)

18. 中城遺跡（96-2）の調査

高槻市北昭和台町313-6において、個人住宅建設工事が計画され、事前に発掘調査を実施した。当該地は遺跡の北半に位置し、平成7年度の調査で石敷き遺構が検出され、さらに埋納銭約6000枚が出土した地区の西隣にあたり、非常に注目される地域である。小字名は「射場之前」で、現状は宅地である。

基本的な層序は、盛土・耕作土・床土（0.42m）、暗灰褐色粘質土〔包含層〕（0.6m）、疊混じり黒褐色粘質土〔包含層〕（0.3～0.4m）で、黄褐色礫土の地山となる。包含層からは古墳時代から中世にかけての土器の小片が出土した。遺構としては、自然の落ち込みがみられたのみで、石敷き等の人工的なものは検出していない。

中城遺跡については、埋納銭の発見により遺跡がさらに北へ広がることがあきらかになっているが、今回の調査では、目立った成果は得ることができなかった。今後の周辺での調査に期待したい。

(高橋)

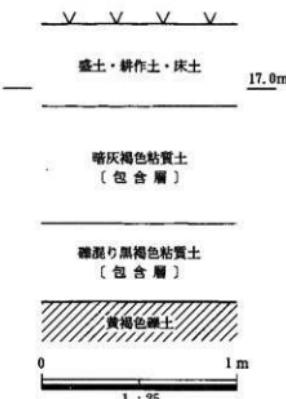


図31. 中城遺跡（96-2）土層模式図

VI 宮之川原遺跡



図32. 宮之川原遺跡調査位置図
19. 96-1 地区
20. 96-2 地区

19. 宮之川原遺跡（96-1）の調査

高槻市宮之川原元町5丁目505-41において、個人住宅建設工事が計画され、事前に発掘調査を実施した。小字名は「宮ヶ市」で、現状は宅地である。

基本的な層序は、盛土（0.85m）、耕作土・床土（0.25m）、褐色粘土混灰色砂礫（0.3m）、灰色砂礫（0.2m）、暗褐色粘土（0.4m）で、暗青褐色粘土に達する。床土以下の層は砂礫層と粘土層が交互に堆積しており、当該地周辺でみられる河床堆積である。遺構を確認することはできず、遺物も出土しなかった。
(高橋)



図33. 宮之川原遺跡（96-1）土層模式図

20. 宮之川原遺跡（96-2）の調査

調査地は高槻市宮之川原五丁目505-31にあたり、小字名は「大明神」、現状は宅地である。このたび、個人住宅の建設工事が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。

宮之川原遺跡で弥生時代の遺物包含層や住居跡などが検出されるようになったのは最近のことである。住宅地の中心部にある当調査区周辺でも下水道工事に伴う発掘調査で、遺物包含層が確認されているが、調査例が少なく遺跡の実態はほとんど知られていない。

届出地中央部に調査壇を設定し、層序の観察と遺構・遺物の確認作業を実施した。層序は盛土（1.0m）、耕作土（0.15m）、床土（0.1m）、褐色土（0.2m）と堆積し、地山は灰褐色砂礫である。褐色土に弥生土器の細片が含まれているだけで、遺構は検出されなかった。

今回の調査は小範囲であり、遺構は検出できなかったが、弥生時代の遺物包含層の広がりを確認することができた。また、褐色土は砂質気味で、地山も砂礫である。当調査区北側の清水幼稚園における平成5年度の調査でも同様の地山であった。このため、宮之川原遺跡は芥川の氾濫原にあり、住居跡などはその微高地に営まれたらしく、今後の周辺での調査が注目される。

（橋本）

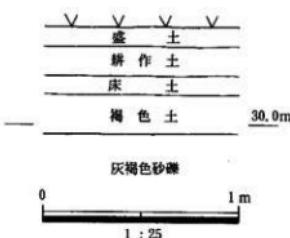


図34. 宮之川原（96-2）土層模式図

VII 大蔵司遺跡

21. 大蔵司遺跡（96-1）の調査

調査地は高槻市大蔵司三丁目3026他にあたり、小字名は「見立」である。今回個人住宅建設工事に伴い、発掘調査を実施した。

当該地は遺跡の北西部にあたる。この周辺では昭和54年に実施された府立芥川高校建設に伴う確認調査をはじめとして、現在までに数次の発掘調査がおこなわれてきたが、遺構の希薄な地域であることが明らかになってきている。

現状は宅地であり、旧地表面からの高さおよそ1.5mのコンクリート擁壁を伴って盛土整地されている。このため、現地表から地山面までかなりの深さとなることが予想されたため、土層の観察を主眼において調査をおこなった。

重機で盛土を掘削し、現地表下1.7mで旧耕作土を検出したが、さらに掘り下げたところ地盤が脆弱となり、地山面までは達していないが安全のため調査を打ち切った。

(高橋)



図35. 大蔵司遺跡調査位置図

VIII 高槻城跡

22. 高槻城跡（96-1）の調査

調査地は高槻市出丸町970-1にあたり、小字名は「南出丸」である。個人住宅建設工事が計画されたため、発掘調査を実施した。現状は宅地である。江戸時代の絵図や現地形の観察による綱張り復元によると、当該地は寛永年間に城の西側につくられた出丸の一画にあたる。

基本的な層序は、盛土（0.9m）、暗褐色粘質土（0.18m）【包含層】の下層は淡灰褐色粘質土【地山】である。

調査区の南半部では、暗褐色粘質土の包含層を切り込む落ち込み状の遺構を検出した。

埋土は暗褐色粘質土で江戸時代の陶磁器類が出土した。

今回の調査では、比較的良好な地山が現地表面下の約1mで検出され、濠などが見られないことから、当地が出丸の一画であることが確実となった。また、検出した遺物が細片であるため具体的な年代は不明であるが、暗褐色粘質土の包含層を確認したこと、さらにこの包含層を切り込む落ち込みを検出したことにより、調査地周辺には中世から近世にわたる高槻城の遺構が残存している可能性が高まったといえる。

（高橋）



図36. 高槻城跡調査位置図

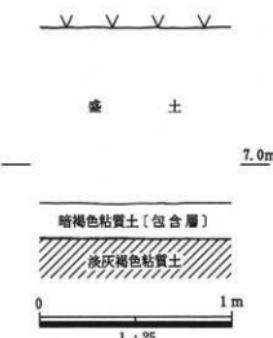


図37. 高槻城跡（96-1）土層模式図

23. 高槻城跡（96-2）の調査

高槻市出丸町964-14にあたり、小字名は「南出丸」である。個人住宅建設に先づつ調査で、層序は表土・盛土（1.0m）、整地土（0.6m）、暗緑灰色粘土（0.7m以上）で、以下は湧水のために不明。暗緑灰色粘土はヘドロ状をなし、外堀の埋土と考えられる。（宮崎）

IX 安満遺跡

24. 安満遺跡（96-1）の調査

高槻市安満新町376-6 にあたり、小字名は「灰原」と称する。現状は宅地であり、今回個人住宅建築工事が計画されたため、事前に調査を実施した。

今回の調査地は旧西国街道に南接し、遺跡の中央部北縁に位置する。調査は、届出地の南寄りに調査坑を設定し、重機で盛土を除去したのち人力で精査した。

基本層序は、盛土（0.8m）、黒青色土（0.1～0.16m）〔耕作土〕、暗青灰色粘質土（0.08m）〔床土〕、灰褐色～灰青色シルト（0.6m）、青灰色砂砾である。調査の結果、床土直下に染付片を見いだしたのみで、該期の遺物包含層、遺構・遺物ともまったく検出されなかった。

（鐘ヶ江）



図38. 安満遺跡調査位置図

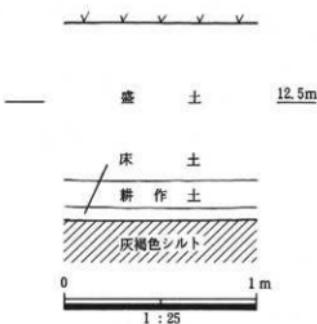


図39. 安満遺跡（96-1）土層模式図

X 梶原寺跡

25. 梶原寺跡（96-1）の調査

調査地は梶原一丁目1137番地にあたり、小字は「山本前」である。今回の調査は社務所の建設に先だって実施したものである。調査地周辺では、大型の掘立柱建物や瓦窯跡などの寺院に関連する遺構・遺物がまとまって検出されていることから、今回の調査区内にもこれらに関わる遺構・遺物の存在が予想された。

調査地の現状は宅地であることから、重機によって盛土等を除去したのち、人力によつて遺構・遺物の検出につとめた。基本的な層序は、表土（0.1m）、暗褐色土（0.1m）、青灰色粘土（0.1m）、茶褐色土（0.1m）、暗黄褐色砂質土（0.2m）、黄褐色粘質土（0.1m）、暗灰色粘質土（0.1m）、暗黄褐色砂礫（0.2m）、青灰色砂礫（0.2m）、暗褐色礫土（0.2m）、黒褐色土（0.1m）、暗青灰色礫土〔地山〕である。地山面の標高は11.5m～11.7mをはかり、南東方向にむかってわずかに傾斜している。

遺構・遺物（図版第15・16、図41）

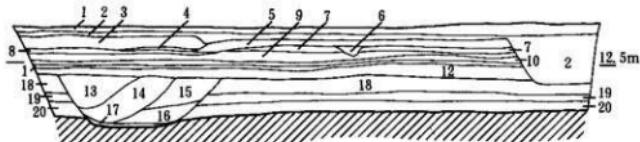
遺構は上下2面で認められた。青灰色砂礫を地山とする上層の遺構には、溝が1条ある。溝1は、調査区の南端で検出した。等高線に沿うように直線的にのびる南北溝で、幅2.6m、深さ0.8mをはかる。断面の形状は逆台形状をなし、底はほぼ平坦である。埋土は底に黒褐色粘土が0.1m堆積する以外はすべて礫が主体となっており、埋土の下位では人頭大の礫もみとめられた。

下層の遺構は黒褐色土を掘り込んで形成されていた。調査区中央で検出した土坑1は等高線に直交するように掘削されていた。平面形は方形をなし、主軸の方向はN-47°-Eである。底はほぼ平坦かつ水平となり、隔壁面はわずかに外傾しながらも直線的にたちあがっていた。埋土は暗茶褐色礫土である。全長2.5m、幅は北端で0.6m、南端で0.75mをはかり、深さは0.1mである。遺物は出土しなかった。

遺物は包含層および整地土から土師器（1・2）や瓦（3～6）の小片がわずかに出土したのみで、遺構に伴うものはなかった。瓦は大部分を平瓦が占め、瓦当類はみられない。



図40. 梶原寺跡調査位置図



- | | | | |
|-----------|------------|---------------|-----------|
| 1. 黒褐色土 | 6. 青灰色礫土 | 11. 暗灰色砂質土 | 16. 暗灰色礫 |
| 2. 暗褐色土 | 7. 茶褐色土 | 12. 暗黃褐色砂礫 | 17. 黑褐色粘土 |
| 3. 暗灰色土 | 8. 茶褐色土 | 13. 暗灰色砂礫(含炭) | 18. 青灰色砂礫 |
| 4. 黑色土 | 9. 暗黃褐色砂質土 | 14. 黑灰色砂礫 | 19. 暗褐色礫土 |
| 5. 青灰色粘質土 | 10. 黃褐色砂質土 | 15. 暗灰色砂礫 | 20. 黑褐色土 |

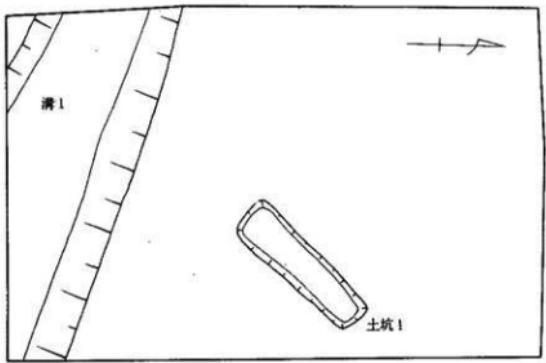


図41. 梶原寺跡 平面図

小 結

今回の調査では土坑1基と溝1条を検出した。このうち土坑1は平面や断面の形状から、掘形の南小口部の幅が広いことや、断面の形状からすれば、墓壙であったとかんがえられ、この場合、頭位は南方向にあると考えられる。土坑内からは遺物が出土しなかったものの、直上の暗褐色礫土層には布留式土器を含むことから、この時期を下限とすることができよう。

溝1は等高線に沿って直線的にのびることから、人工的に掘削されたとかんがえられる。埋土の大部分は礫が占めているうえ、溝さえや再掘削などの維持活動をおこなっていないことから、短期間のうちに埋没したとかんがえられる。この溝からも時期を決定しうる遺物は出土しなかったものの、古墳時代の包含層とみられる暗褐色礫土層を切り込んで形成されることや周辺での遺構分布状況からすれば、奈良時代の溝と考えられる。溝の機能としては、排水や区画などがあげられるが、人工的に掘削された割には存続期間が短いことを考慮すれば、北に位置する瓦窯や工房に関わる運搬用の水路などの限定的な目的をもって掘削されたのかもしれない。

(宮崎)

X I 梶原南遺跡

26. 梶原南遺跡（96-1）の調査

調査地は高槻市梶原四丁目5-2にあたり、小字名は「小無月」、現状は水田である。このたび倉庫建設工事が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。

当調査区は梶原南遺跡の東北部にあたり、周辺では弥生時代後期から古墳時代の遺物包含層が確認され、西方の府営住宅建設時には古代・中世の建物群なども調査されている。

調査は届出地に2箇所の調査坑を設け、断面の観察と遺構・遺物の検出に努めた。調査坑の層序はいずれも耕作土（0.2m）、床土（0.2m）、褐色土（0.2m）と堆積し、地山は黄褐色土である。褐色土が周辺で確認されている遺物包含層に相当するが、遺物は検出されなかった。また、遺構も確認できなかった。

今回の調査では明確な遺構を確認できなかったが、梶原南遺跡の広がりを知ることができた。

（橋本）

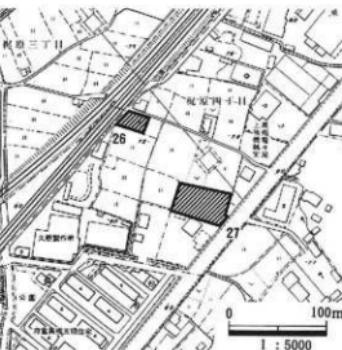


図42. 梶原南遺跡調査位置図

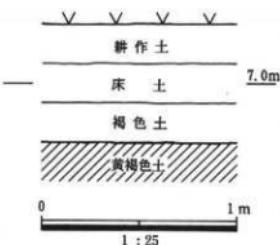


図43. 梶原南遺跡（96-1）土層模式図

27. 梶原南遺跡（96-2）の調査

梶原南遺跡は高槻市東部の北摂山地と淀川に挟まれた狭い平野部に位置する。周辺には梶原寺跡や梶原瓦窯跡、上牧遺跡など、古代・中世の著名な遺跡が分布し、山沿いには古代山陽道を踏襲した西国街道がのびる。

これまでに実施した発掘調査では、弥生時代～中世の遺構、遺物を検出している。遺跡の中心となる奈良時代には約30棟の掘立柱建物、棚列、井戸のほか、「新屋首乙賣」と記された木簡や帶金具などが出土したことから、官衙に関わる集落であると想定してきた。

今回の調査地は高槻市梶原4丁目664-1にあたり、小字名は「大明神」である。駐車場

造成に先立ち、6ヶ所の調査区を設定した。各調査区からは、奈良時代を中心とした遺構を検出した。とくに南西部の第1調査区では高槻市東部地域ではじめての弥生時代の方形周溝墓や奈良時代の大規模な柱穴を伴った大型の掘立柱建物を検出したことから、調査区を拡張し、これら遺構の把握につとめた。

表土掘削には重機を使用し、その後人力で遺構検出を行った。基本的な層序は、盛土(1.3m)、耕作土(0.2m)、床土(0.2m)、黒褐色粘質土(0.15m)、明褐色粘質土(地山)であり、地山は北東から南西にむかってゆるやかに傾斜している。

遺構(図版第17~20、図43~45)

検出した遺構は、弥生時代の方形周溝墓、古墳時代の竪穴住居跡、奈良時代の掘立柱建物跡、鎌倉時代の土坑などである。以下、時代ごとに概要を述べる。

〔弥生時代の遺構〕

方形周溝墓1は第1調査区東部で検出した。周溝は西、南、北側で確認し、東側の周溝は調査区外にのびる。わずかに遺存した南東隅部や東側に隣接する第5調査区との位置関係から、東西12m、南北14mの規模に復原できる。周溝の幅は0.8~1.4m、深さ0.4~0.6mで、断面はU字形を呈する。埋土は暗灰色粘質土まじりの茶褐色土で、弥生時代中期の壺、甕の底部が埋土中位から出土した。後世の削平のため盛土及び埋葬施設などは遺存しなかった。

方形周溝墓2は方形周溝墓1に西接し、東西9m、南北8.1mをはかる。周溝は西、南、北側をめぐり、北西隅では途切れている。東側で検出しなかったのは、方形周溝墓1の西溝と共有しているからであろう。周溝の幅は0.6~1.3m、深さ0.1~0.6mで、断面は逆台形に近いU字形を呈する。埋土は暗灰色粘質土まじりの茶褐色土で、弥生時代中期の壺、甕の底部が中位より出土した。

〔古墳時代の遺構〕

竪穴住居1は第1調査区北西部で検出した。一边約6m、床面積30.8m²の方形住居である。主柱穴は4個で構成され、同位置で建替えが行なわれている。各柱穴は切り合っており、当初の柱間は2.7mであったのが、建替えの際3.2mに広げられていた。いずれも直径は0.4m、深さは0.6~0.7mである。北西隅の柱穴より6世紀前半頃の須恵器杯蓋が出土している。周壁溝は全周せずに西辺の中央部で1mにわたって途切っていた。幅0.2~0.3m、床面からの深さは0.05~0.12mをはかり、埋土は暗灰褐色土である。溝の南東隅では壁柱の痕跡と思われる深さ0.05mのピットが4個認められた。床面は四隅が低くなっている、東辺中央部では、埋土中に炭や焼土を含んだ直径0.2m、深さ0.1mのピットを検出した。壁面や底面は焼けていなかったが、検出位置や埋土の状況から、炉跡と考えられる。埋土中からは製塙土器が出土した。

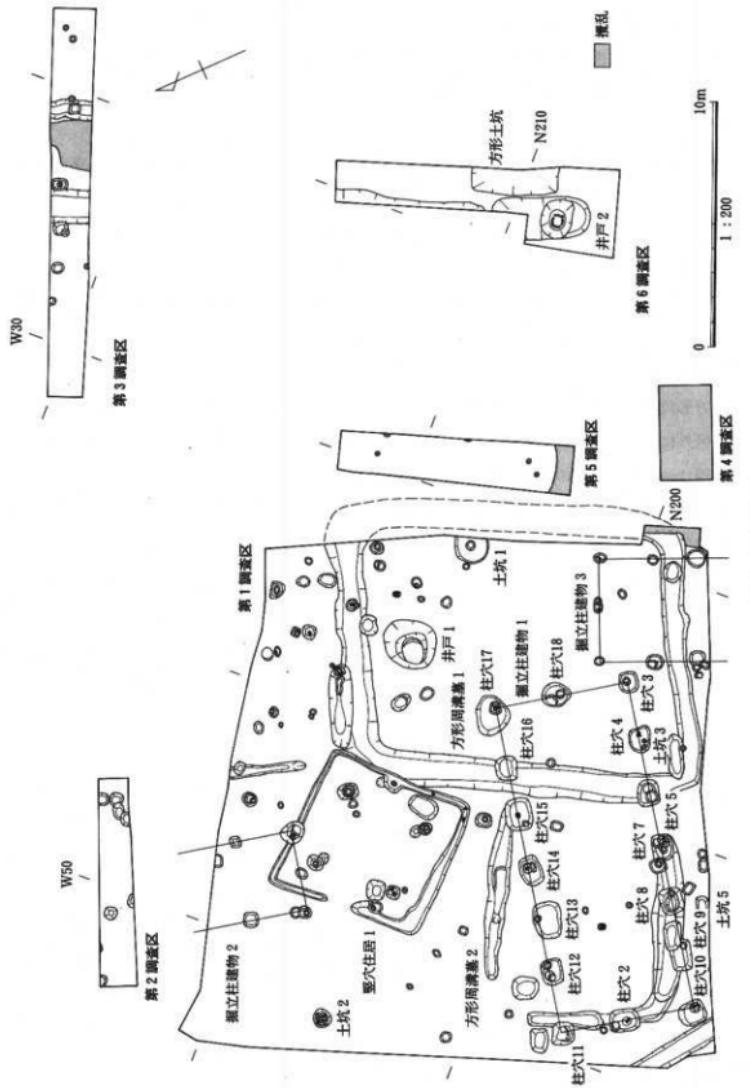


图44. 遗址平面图

[奈良時代の遺構]

掘立柱建物 1 は第 1 調査区南西部で検出した。梁行 2 間 (5.5m)、桁行 6 間 (13.7m) の東西棟である。柱間は桁行、梁行ともに 2.3m と等しい。建物の方向は N-13.5°-E を示す。柱穴の掘形は東西 0.8~1.6m、南北 0.8~1.4m の方形を呈し、深さは 0.3~0.5m をはかる。柱穴 2・4・7・10・14・15・17 には直径 0.25~0.35m の柱根が遺存し、柱穴 15・17 には根石が据えられていた。柱穴 2 より須恵器杯、柱穴 8 より土師器杯が出土した。ともに 8 世紀前半頃のものである。

掘立柱建物 2 は第 1 調査区北西部で検出した南北棟で、南側は竪穴住居 1 を切る。北側は調査区外へ続く。梁行 2 間 (3.3m)、桁行 1 間以上 (2.4m 以上) をはかる。柱間は梁行が 1.6m、桁行が 2.4m である。建物の方向は N-12.5°-E を示し、建物 1 の方向に近い。柱穴の掘形は直径 0.3~0.8m の円形及び一辺 0.4~0.6m の方形であり、深さは 0.3~0.5m をはかる。柱穴埋土より土師器、須恵器の小片が出土した。

掘立柱建物 3 は掘立柱建物 1 に東接する南北棟で、南側は調査区外へ続く。規模は梁行 2 間 (4.2m)、桁行 2 間以上 (4 m 以上) である。柱間は梁行が 2.1m、桁行が 2 m である。建物の方向は N-23°-E を示す。柱穴の掘形は直径 0.3~0.7m の円形であり、深さは 0.1~0.4m をはかる。柱穴埋土より土師器、須恵器の小片が出土した。

井戸 1 は第 1 調査区北東部で検出した。掘形の平面は円形であり、直径は上部で 2~2.3m、底部で 0.6m、深さ 2 m をはかる。井戸枠などは遺存していなかった。埋土は茶褐色土層から青灰色粘質土層までの 8 層に分かれた。埋土の堆積状況から、1~4 の上層、5~8 の下層に大きく分けられる。上層の埋土は西から投棄されたかのように東に向けて傾斜しており、暗灰色粘質土層 (3) で焼土、炭の層が薄い縮状にみられたのにに対し、下層では均質な粘土がほぼ水平に堆積していた。厚さは上層で 1.3~1.5m、下層で 0.5~0.7m をはかる。遺物の大半は暗灰色粘質土層を中心とする上層で出土した。茶褐色土層 (1) で土師器、暗灰色粘質土層 (3) で 8 世紀前半の土師器、須恵器、フイゴの羽口、鉄製品、付札や加工した木片、ヒョウタン、モモの種子などがまとまっていた。下層では遺物はほとんどみられず、青灰色粘質土層 (7) からわずかにヒョウタンが出土するのみである。遺物の出土状況や埋土の状況から、井戸は下層の青灰色粘質土層まで埋没した後、人為的に埋め戻されたと考えられる。

井戸 2 は第 6 調査区南西隅で検出した。掘形の平面形は長径 1.8m、短径 1.3m、底部は長径 0.75m、短径 0.6m の梢円形を呈する。深さは 1.5m をはかる。井戸枠は湾曲する板 3 枚で構成されたくり抜き状をなし、内法は直径 0.5~0.6m である。板材は幅 0.3~0.8m、長さ 1.2~1.4m、厚さ約 0.1m をはかる。井戸枠の東側に直径 0.07m、長さ 0.82m の杭が差し込まれていた。板材の固定のために使用されたとおもわれる。枠内の埋土は青灰色粘質土であ

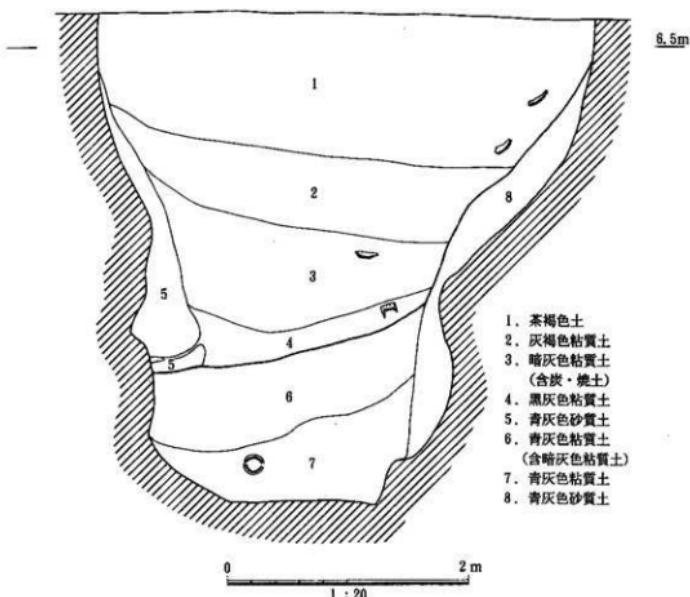
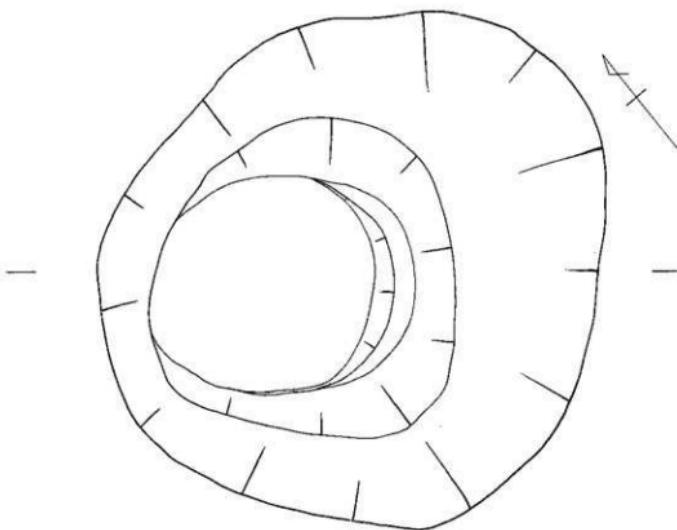


図45. 井戸1 平面図・断面図

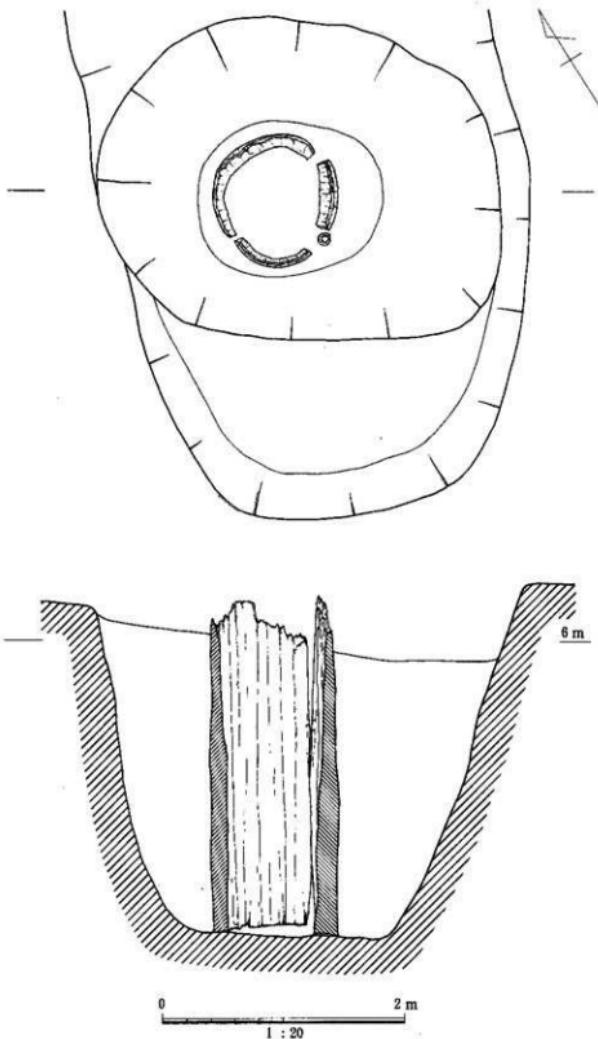


図46. 井戸2 平面図・立面図

り、上位からは8世紀中頃の土師器杯と皿が1点ずつ出土し、下半部では多数の土師器、須恵器、加工した木片やモモの種子10数個がまとまっていた。

土坑1は第1調査区東端で検出した。直径1.3mの円形で、深さ1.0mをはかる竪穴状の土坑である。埋土はブロック状の暗灰色土・黄褐色土・灰褐色土が混在し、一部に暗灰色粘質土が混入する上層と暗灰色砂質土の下層に分かれ。自然の流入土や腐食土層がみられないことから、掘削した後、短期間のうちに一気に埋められたと考えられる。上層より8世紀後半の土師器平瓶、底部を穿孔した土師器甕が出土した。

〔鎌倉時代の遺構〕

土坑2は第1調査区北西部で検出した。直径0.7mの円形で、深さ0.2mをはかる。断面は逆台形を呈する。底部から0.02~0.05m浮いた状態で長さ0.4~0.5m、幅0.07~0.08mの板材が3枚及び1本の角材が南北方向に並列して置かれ、2枚の板材間には3個の拳大的礫が並べられていた。埋土上部中央からは瓦器及び獸齒が出土した。

以上の遺構の他に、時期不明の土坑を3基検出した。

土坑3は調査区南部で検出した。方形周溝墓1を切る。平面形は長径1.8m、短径0.6mの長円形で、深さは0.25mをはかる。断面はU字形を呈し、底部は平坦である。土師器、須恵器の小片とともに鉄滓が出土した。

土坑4は竪穴住居1の南東床面上に重複して検出した。平面形は長径1.8m、短径0.8mの楕円形で、深さは0.15mをはかる。断面は浅いU字形を呈する。土師器、須恵器の小片が出土した。

土坑5は調査区南端部で検出した。長径1.1m、短径0.4mの楕円形で、深さ0.1mをはかる。断面はU字形である。土師器、須恵器の小片が出土した。

遺物（図版第21~24、図46~48）

各調査区は包含層の大部分が削平されていたうえ、遺構から出土した遺物も多くは小片となっていたため、完形に復原できたものは少ない。弥生時代~中世にかけての土器、木製品、金属製品などがあり、その大部分は奈良時代の遺物が占める。それぞれの遺物については時代や遺構ごとにその概略を述べる。

弥生時代の遺物には方形周溝墓2から出土した弥生土器（1~4）がある。いずれも完形には復原できなかったものの、第II様式から第III様式にかけての壺や甕である。大形甕の口縁部（1）は「く」字状に屈曲し、端部を拡張する。風化が著しく、調整は不明である。

古墳時代の遺物は大部分が竪穴住居1から出土し、土師器、須恵器、製塙土器などがある。5は柱穴から出土したMT15形式の須恵器杯蓋である。比較的シャープな綾をとどめ、天井部のヘラケズリも丁寧である。遺存するのは全体の1/4ほどであり、口径14.0cm、現存高4.6cm

をはかる。6は炉跡から出土した製塙土器である。丸底I式とみられ、薄手のコップ状を呈している。焼成は堅致で、表面は火熱によって赤変する。

奈良時代の遺物はもっとも出土量が多い。土師器や須恵器の土器類のほか、木製品や鉄製品、フイゴ羽口や鉄滓などの鍛造に関係する遺物がみられ、土師器の占める割合が高い。各調査区の遺構や包含層から出土し、井戸1・2がその大部分を占める。

掘立柱建物1からは柱穴2より須恵器杯A(8)、柱穴8より土師器杯A(7)が出土している。7は外傾ぎみに立ち上がる口縁部をもち、底部外面にはヘラ圧痕をとどめる。

井戸1の遺物には8世紀前半頃の土師器、須恵器、製塙土器、土製品、木製品、鉄製品がある。土師器には杯(9~12)、鉢(13)、甕(14~20)がある。杯Aは3点出土した(9~11)。9は口縁部が外傾し、端部は丸く肥厚する。外面のヘラミガキはやや粗いものの、内面は底部に螺旋暗文、口縁部には2段の斜放射暗文を施す。11の外面は粗くて深い特徴的なヨコハケで調整する。鉢A(13)は口縁部が内湾し、端部は面をもつ。体部内面の調整は横方向のヘラケズリである。甕Aには小形(14)、中形(15・16)、大形(17~19)があり、いずれも体部外面をタテハケで調整する。大形品の口縁端部は面をもつ。須恵器(20~22)はいずれも杯である。杯A(21)は扁平な底部に湾曲暗味に立ち上がる口縁部がつく。底部外面には回転ヘラケズリ痕を明瞭にとどめる。杯B(22)の底部には外傾する高台がつく。底部から口縁部にかけては緩やかに湾曲しながら移行する。製塙土器(23)は鉢形を呈した粗製品である。器壁はやや薄手で、硬質の焼成である。外面の調整はわずかになら程度であるため、幅約2.0cmの粘土紐の痕跡をとどめている。内面はハケで調整しており、本市での出土例は多くない。付札(44)は両端を尖らせ、一方の端部の両側面に切り込みをいた板で、各面とも丁寧に削り込んでいる。全長11.1cm、幅1.4cm、厚さ0.8cmをはかる。文字や墨痕は看取できなかった。48はフイゴの羽口である。遺存するのは先端の一部のみであるが、端部は強い火熱により青灰色に変色し、細かな気泡が顯著である。胎土には精緻な粘土を用い、モミやワラを混和している。厚さは2.0cmをはかり、先端部は直径6.5cm、孔径3.0cmに復原できる。鉄製品(49)は折損して方形の薄い板状となったもので、全体が鏽に被われている。破断面の形状は鋭角三角形となることから刀子の一部とかんがえられる。現存長3.4cm、最大幅1.6cm、厚さ0.5cmをはかる。

井戸2の遺物には8世紀中頃の土師器、須恵器、木製品などがある。土師器杯A(24)は扁平な底部から口縁部が外反後に内湾し、端部は肥厚する。外面は底部にヘラケズリをほどこし、口縁部のヘラミガキは粗い。内面は底部に螺旋暗文、口縁部に一段の斜放射暗文をほどこす。口径18.8cm、器高4.3cmをはかる。皿A(25)は24とともに出土したもので、口縁部はゆるやかに湾曲しながらたちあがり、端部は丸くおわる。底部外面には粗いヘラミガキ、口縁

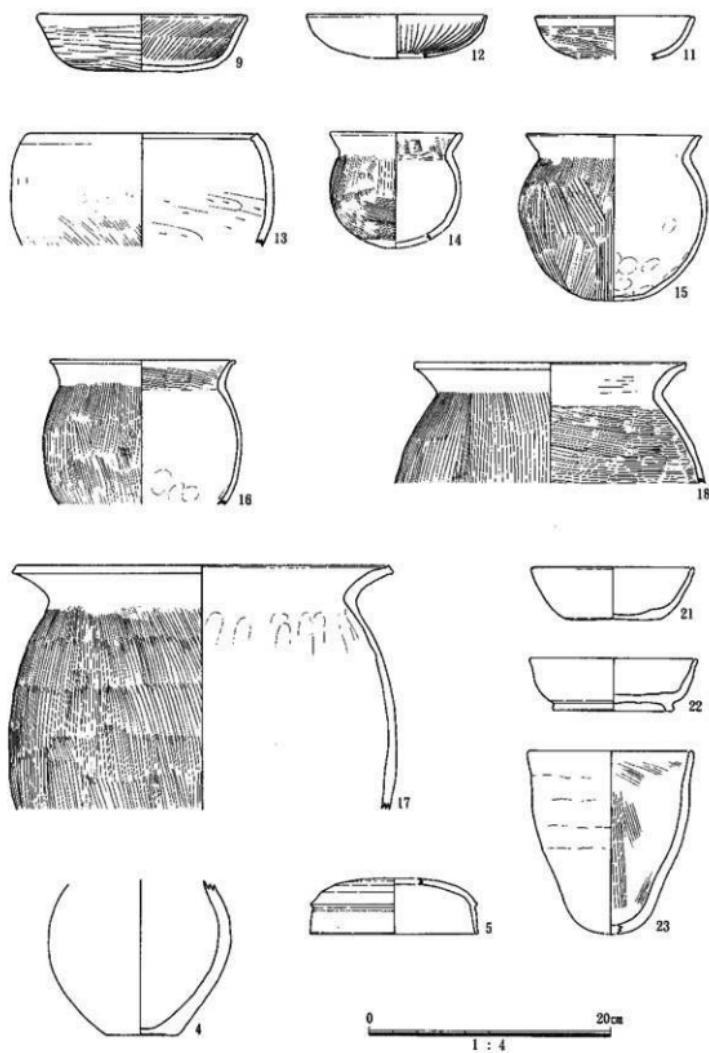


図47. 桐原南遺跡(96-2) 土器 方形周溝墓2(4) 積穴住居1(5) 井戸1(9・11~18・21~23)

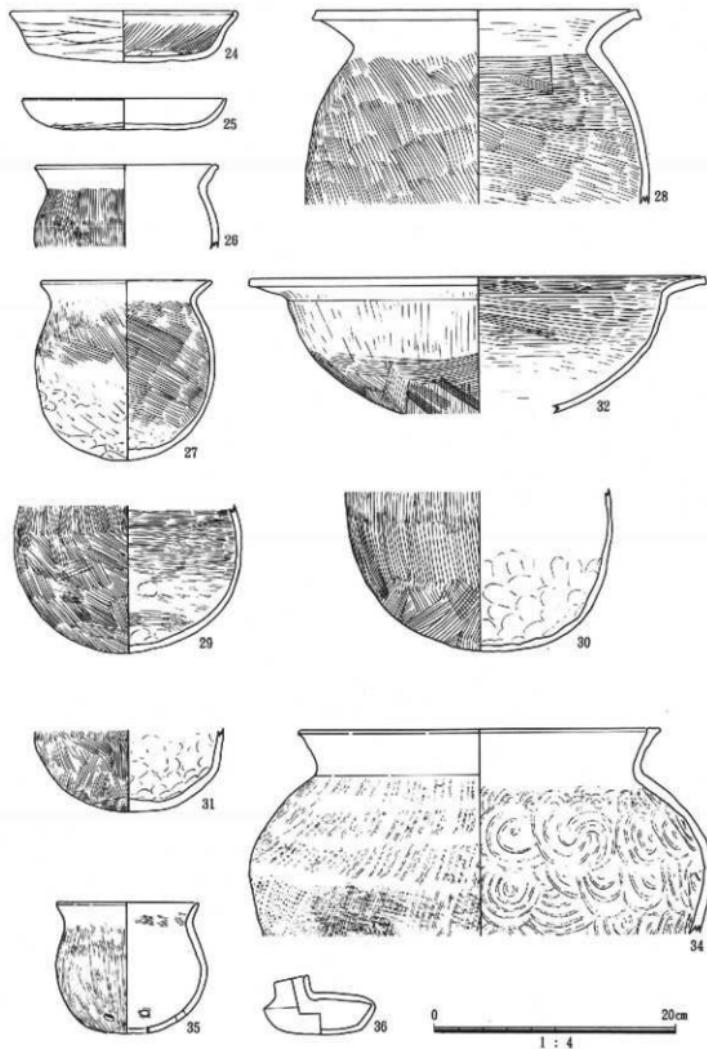


図48. 桐原南遺跡(96-2) 土器 井戸2(24~32・34) 土坑5(35・36)

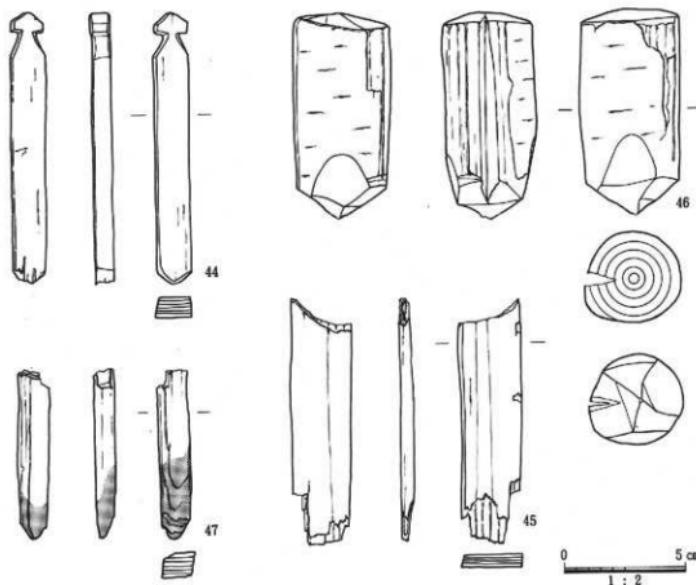


図49. 梶原南遺跡 (96-2) 木製品 井戸1 (44) 井戸2 (45~47)

部は弱いヘラケズリをほどこす。甕A (26~31) はいずれも球形の体部をもつ。29~31は体部下半のみ出土したもので、30・31は内面の指圧痕が顕著である。鉢A (32・33) は半球形の体部に屈曲して開く口縁部がつく。32の体部はタテハケの後、下半部のみ別のハケ原体で二次調整をおこなう。須恵器は少ない。唯一圓化できた甕A (34) はやや肩の張った体部から屈曲して斜め上方にのびる口縁部がつく。体部は内外面ともタタキ成形後かるくなっている。木製品のうち、45は両端を折損する板である。上下両面とも側面から削り込まれるためにかすかな稜をとどめる。現存長10.4cm、幅2.5cm、厚さ0.5cmをはかる。墨痕等は看取できなかった。46は用途不明の木製品で、短い丸太材の先端を削って杭状に加工していた。側面に加工痕や使用痕は無く、樹皮をとどめている。全長8.5cm、直径約4.0cmをはかる。47は火付木とみられ、スギもしくはヒノキの割木を用いている。

土坑1からは土師器が2点出土した。甕A(35)は球形の体部からゆるやかに外反する口縁部がつく小形品である。底部には焼成後に穿たれた直径0.8cmの円孔を3カ所にとどめ、それぞれの位置関係からもとは6カ所に穿たれていたと復原できる。蓋にしたのかもしれない。平瓶(36)は扁平な体部に、短い円筒状の口縁部がつき、端部は丸くおわる。口径2.4cm、器高4.6cm、最大径9.2cmをはかる。土師器での類例は乏しく、須恵器を模したとかんがえられる。8世紀後半頃とかんがえられる。

土坑3から出土した鉄滓(50)は拳状をなし、全体が鏽で被われている。鍛冶滓とみられ、全長6.6cm、幅3.9cm、厚さ3.4cm、重量100gをはかる。

方形土坑からは瓦器(37~40)や白磁(41)、青磁(42・43)が出土したもののはずれも小片である。これらは11世紀後半~12世紀にかけての37・38・41、12世紀後半から13世紀にかけての39・40・42・43の2つの時期に分けられる。

小 結

今回の調査で検出した遺構には、弥生時代の方形周溝墓2基、古墳時代の堅穴住居跡1基、奈良時代の掘立柱建物3棟、井戸2基、土坑1基、鎌倉時代の土坑2基などがあり、各時期の遺構が断続的に営まれていたことがあきらかとなった。以下、これらの時期と変遷について述べる。

檜尾川東岸、高槻市東部地域ではじめて検出した2基の方形周溝墓の時期は、周溝より出土した土器から弥生中期前半から中頃にかけてであることが判明している。両者の位置関係をみると方形周溝墓2は大形の方形周溝墓1の西溝を利用して、これに寄り添うように築いていることがうかがえ、方形周溝墓1→方形周溝墓2という順序がかんがえられる。また、共有する方形周溝墓1西溝に再掘削の痕跡がみられないことから、方形周溝墓2は方形周溝墓1の築造後の早い段階で築いたようである。さて、梶原南遺跡では弥生時代中期の遺構・遺物が乏しく、土坑やわずかな遺物を得るにとどまっていたが、方形周溝墓を検出したことにより弥生中期前半から中頃にかけて集落が一定期間存続していたことがはじめて言及できるようになった。

古墳時代後期の遺構には堅穴住居1がある。方形周溝墓1に西接しつつあたかもこれを避けようのような位置関係にある。これは両者の時期差からすれば、遺存していた方形周溝墓の盛土を避けたためと理解されよう。この住居は西側周壁溝の中央が途切れ、相対する東周壁溝側には炉跡らしき焼土坑があったことから西側が出入口であろう。床面の四隅が低くなっていたのはベッド状遺構の名残かもしれない。

奈良時代には遺構・遺物ともに最も豊富となる。3棟の掘立柱建物のうち、掘立柱建物1は梁行2間、桁行6間、柱間は2.3m等間をはかり、30cm前後の太い柱を用いる大規模な建物である。柱穴に抜き取り痕は無く、掘形出土の土器から8世紀前半頃とかんがえられる。建物

の方向はN-13.5°-Eを示し、掘立柱建物2のN-12.5°-Eと極めて近い。また、掘立住建物2の西側柱列は掘立柱建物1の東西中軸線の延長上に位置することや建物の方向などから、両者は計画的に配置されたといえよう。掘立柱建物3は掘立柱建物1に近接し、方向もN-23°-Eと東偏することから前者よりも後出するとかんがえられる。

井戸1は、埋土上層から出土した遺物から、8世紀前半から中頃にかけて廃棄されたとかんがえられる。出土遺物のなかには付札や刀子状鉄製品など跡の性格を示しうるもののか、フイゴ羽口などの鋳造にかかる特殊な遺物は、既存の調査例と同様に鉄製品の生産を裏付けるものといえる。井戸3は断面U字型を呈した3枚の板によって構成された割り抜き状の枠をもつ。出土した土器はいずれも8世紀中頃から後半にかけてのものであり、杯・皿などよりも甕類の多さが目立つ。この傾向は井戸1出土の土器にもみられる。

以上のように奈良時代の遺構は8世紀前半から中頃と中頃から後半にかけての2時期に分かれ、前者には掘立柱建物1・2と井戸1、後者には掘立柱建物3、井戸2、土坑1が該当する。これらの存続期間は各遺構や包含層から出土した遺物からほぼ奈良時代におさまるとかんがえられる。また、掘立柱建物1のような大型の建物は官衙等にみられるものであり、平成2年に南西隣接地で調査した大型倉庫などの建物群（「梶原南遺跡の調査」『高槻市文化財年報平成2年度』）との関連のなかでとらえるべきであろう。

中世の遺構・遺物は少なく、土坑2基と微量の遺物しか得られなかったが、これまでの調査と同様に11世紀後半から12世紀にかけてと12世紀後半から13世紀にかけての2時期がみられた。この時期の遺構には既述の南西隣接地で検出したし字状に屈曲した大溝があり、一辺50m前後の方形に巡るとかんがえられていた。今回の調査地からはこれに対応する溝が検出されなかつたため、予想よりも広い範囲をめぐっているのか、もしくは単なる用水路であったのかはあきらかにできなかった。

今回の調査では奈良時代を中心とした梶原南遺跡の具体相についてさらに迫ることができた。本遺跡をふくめた檜尾川東岸地域の様相については未解明の点が多いものの、徐々に解明されてきた。今後の調査の進展によってさらに明らかになると思われる。

（川村・宮崎）

X II 阪神・淡路大震災被災遺物の復元

平成7年1月17日に発生した阪神・淡路大震災によって被災した資料は、弥生土器109点、土師器37点、須恵器29点、埴輪43点、陶器類4点の合計222点に及んだ。これらの資料は平成7・8年度の2か年にわたって復元作業をおこない、昨年度は弥生土器59点、須恵器13点、埴輪38点の合計110点を復元し終えている。

今年度は、昨年度に引き続いて復元作業をおこない、112点の復元を完了した。内訳は弥生土器50点（安満遺跡、芥川遺跡、古曾部・芝谷遺跡、天神山遺跡）、土師器37点（鳴上郡街跡、新池遺跡）、須恵器16点（新池遺跡、塚原古墳群）、埴輪5点（新池遺跡）、陶器類4点（高槻城跡）である（図版第25・26）。

これらの復元資料は市立埋蔵文化財調査センター2階の収蔵室整理棚に陳列した。これらは整理棚の固定や転落防止用ネット、土器の安定した設置など、再び転落することのないように展示・収蔵をおこなっている。

種別	平成8年度	平成8年度内訳	平成7年度	復元総数
弥生土器	50	安満遺跡15、芥川遺跡5、古曾部・芝谷遺跡18、芝生遺跡10、天神山遺跡2	59	109
土師器	37	鳴上郡街跡24、新池遺跡13	0	37
須恵器	16	新池遺跡5、塚原古墳群11	13	29
埴輪	5	新池遺跡5	38	38
陶器類	4	高槻城跡4	0	4
合計	112		110	222

表1. 復元資料の内訳

X III 今城塚古墳測量調査

今城塚古墳は、6世紀前半に築造された二重の濠を有する巨大な前方後円墳で、現在では531年に没した繼体天皇の真の陵墓と考えられている。昭和33年2月に国史跡の指定を受け、昭和45年から着手された公有化事業の結果、平成7年度末で指定面積80,632m²のうち82.9%の公有化を完了している。

今回、平成8年度国庫補助事業（総額6,200,000円）として、古墳の現状を正確に記録する目的で測量調査を実施した。

実施にあたっては、指定地内については地上測量により縮尺1/100、等高線間隔25cmの原図を作成し、縮尺1/250、1/500、1/1000の現況平面図を編集図化するとともに、空中写真撮影をおこなった。地上測量は直営事業、空撮及び図化は委託事業として実施した。

地上測量は、電子レベルを使用して測点を決定、同点の局地座標を光波測距儀で測定して図上に記録する方法をとった。現地作業は平成8年11月6日に着手、平成9年1月17日に終了した。作成した原図はA2判で54枚にわたる。

調査の結果

実測値の精度向上とともに、古墳築造以後の形状の変化を詳細に把握することができ、今後の作業の基本平面図を作製することができた。現時点の成果を列記する。

- 1 かつて武人と大型の家の埴輪を出土した、北側内堤中央部の埴輪区の形状と規模が判明した。幅約30mで、北側内堤の幅約24mより約6m拡張されている。
- 2 墳丘部及び内堤部において、中世末の砦築造時の改造が具体的にしられるようになった。
 - (a) 前方部前面中央は、砦築造時の盛土が幅30mにわたって内濠側へ約4mせりだす一方、対側の内堤は直線的であり、本来の前方部は直線的に築造されたと考えられる。
 - (b) 内堤の10か所で溝状造構を確認した。内堤に直交する6か所は、砦築造にあたり堤を区画するため開削された堀割で、他は後世の用水確保にかかるものと考えられる。

3 以上を考慮して古墳実測値及び想定復元値（ ）を示すと以下のとおりである。

全 長	348.0m (348m)	後円部側	前方部側
全 幅	342.0m (342m)	内濠幅	20～35m (26m) 24～26m (26m)
墳丘長	185.0m (185m)	内堤幅	22～24m (25m) 24～26m (25m)
後円部径	100.0m (100m)	外濠幅	14～30m (23m) 18～25m (25m)
前方部幅	141.5m (148m)	外堤幅	11m (11m)
後円部高	11.0m 前方部高 12.0 m		

4 北・西側内堤で原位置に立つ埴輪を確認。埴輪列が良好な遺存状態にあると推定できた。

小 結

作成した現況図は今後の作業の基本平面図となるものである。今回、古墳全域をくまなく地上測量した結果、実測値の精度向上とともに、古墳築造以後とくに今城塚の名の由来する戦国時代の城砦築造に伴う形状の変化を詳細に把握することができた。
(鐘ヶ江)

XIV まとめ

今年度は嶋上郡衙跡および周辺地域での調査と阪神・淡路大震災の復旧・復興に伴うものであった。

嶋上郡衙跡の調査では正倉院の西北に位置する44-B地区において古墳時代の構を検出した。この一帯で古墳時代頃には北西から南東へむかって流れる河道跡があり、奈良時代にかけて徐々に埋没したことが判明している。近年の調査では郡衙の西方地域において7~8世紀頃の掘立柱建物や井戸などの遺構がまとまって検出されている。これらの集落と郡衙とがどのような関係にあるのかは現状では明らかにし得ないものの、この集落と郡衙とのあいだに帯状の空間が広がっていることは、ここが単に湿地状であっただけなく、官衙城と集落とを画すための意図的なものであったと理解できよう。いっぽう、郡衙北方地区では7世紀の遺物をともなう遺構を多数検出している。この一画を占める15-G・H地区で検出した2棟の掘立柱建物は、規模も比較的大きく、建物の方位をそろえたL字状の位置関係を示すなど計画的に配置されたことがうかがえる。出土遺物は7世紀前半~中頃の良好な土器類のほか、新たな形式の軒丸瓦を検出している。加工された凝灰岩製の板石は寺院の基壇に使用されたと考えられる。ただ、今回検出した建物は7世紀前半~中頃とみられ、白鳳期に建立された芥川廃寺との関わりは明確ではない。このほか、調査地周辺では焼土、炭、鉄滓などの鍛冶に関連した遺物が出土するのも興味深い。

郡家本町遺跡は台地上に展開し、東部で弥生時代後期の竪穴住居、西部に古墳時代の竪穴住居、奈良時代にはこれらのあいだで大規模な掘立柱建物を検出している。また、平安時代中期には南西隅で瓦窯を検出しており、芥川廃寺に供給したことが判明している。今年度の調査は、この北方にあたり、建物群とは東西にのびる谷地形で画されていてことから、瓦窯に関連した遺構の検出が期待されたが、わずかな柱穴と土坑状の遺構を確認したのみであった。しかしながら、遺跡の縁辺部にあたる今回の調査地までは確実に遺構が分布している状況が判明した。奈良時代を中心に比較的広い範囲に分布すると解される。

郡家今城遺跡で検出した土塙墓は、周辺調査区にひろがる庄内期を中心とした土塙墓群に連なるものであろう。今回の調査結果によって分布の北限がほぼ特定できたことから、周辺での検出例を考慮すれば、土塙墓群は東西100m、南北50mの範囲に広がることが想定できる。これまでの検出例が約130基を数えることから、総数は300基を越えるであろう。このような群集土塙墓は嶋上郡衙跡北西部で弥生終末期、孤塚古墳群では古墳時代中期の検出例があり、いずれも嶋上郡衙跡の縁辺部に位置している。未調査域を含めると総数はかなりの数とみられ、当該期の集落規模などを推定するうえでも有力な資料となろう。このほか、郡家今城遺跡で検

出した奈良・平安時代の掘立柱建物群と土壌墓群とのあいだに重複がみられないことは、律令期の土地利用を考えるうえで興味深い。

梶原寺跡では奈良時代の溝を検出した。この溝は等高線に沿って直線状にのびるもので、これまでに検出した掘立柱建物の方向性や条里などに斜行していた。このため、寺院の区画溝と考えるには不自然であり、短期間で埋没することからすれば、むしろ北方約80mに位置する梶原寺瓦窯跡や工房との関連を想定すべきかもしれない。ところで、今回の調査地は梶原寺跡の中心部分とされる畠山神社の隣接地を調査したにもかかわらず、寺跡に関連する遺構や遺物は検出されなかった。同神社以西は谷となって落ち込み、地形的に画された状況にある。これまでの調査で遺構・遺物を検出した地点は、すべて当該地の東側に位置することから、寺跡の中心は東側に偏在するのかもしれない。

梶原南遺跡で検出した掘立柱建物1は梁行2間、桁行6間の規模をもち、直径0.3m前後の柱材が2.1m等間に並ぶ大規模なものである。同遺跡では8世紀前半から後半にかけての掘立柱建物約30棟のほか、棚や井戸などを検出し、これらが一定の範囲内で方向や柱筋を通してまとまる計画的な集落であったことが判明している。出土遺物には「新屋首乙賣」と記された木簡や帶金具、フイゴ羽口や鉄滓などの特徴的なものがあり、官人層が居住する集落と考え

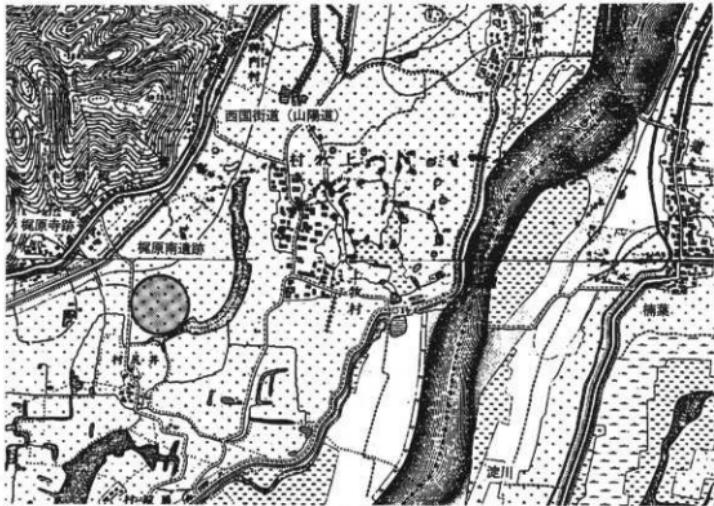


図50. 梶原南道路の位置

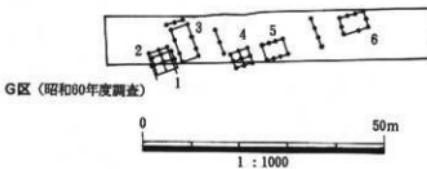
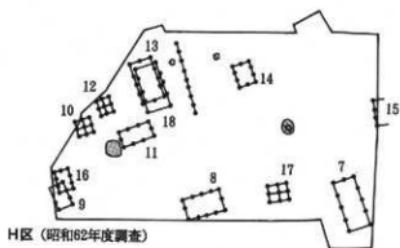
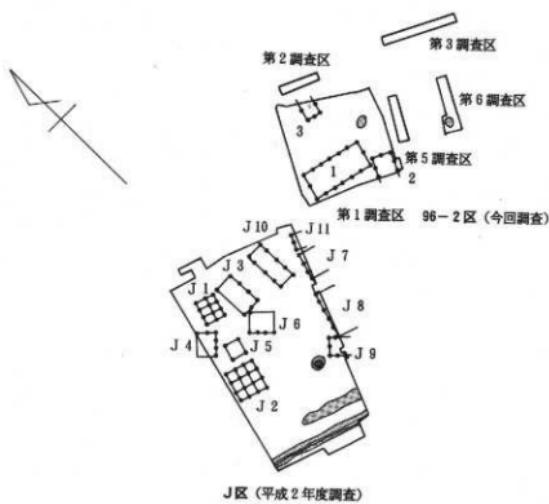


図51. 梶原南遺跡で検出した奈良時代の遺構

統日本記 和銅四年(七一)桑

太政官符 大同一年(八〇七)十月

四年春正月二日未始置郡守縣

應誠省縣馬參百疋拾定事

山背國相樂郡、岡田郡、經喜郡、

山本郡、河内郡、交野郡、楠葉郡、

播磨國九郡卅五疋

諸國縣傳馬

延喜式 兵部省

禁內

山背國相樂郡、岡田郡、經喜郡、

山本郡、河内郡、交野郡、楠葉郡、

備中國五郡廿五疋

元威縣別廿五疋

播磨國五郡七十五疋

河内國郡

播磨國九郡卅五疋

備後國五郡廿五疋

周防國十郡五十疋

和泉國郡

播磨國郡

播磨國九郡卅五疋

安藝國十三郡六十五疋

長門國五郡廿五疋

巴上元縣別廿五疋

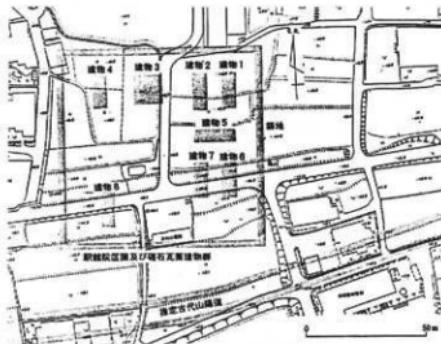
播磨國郡

巴上五十一郡・別城五疋

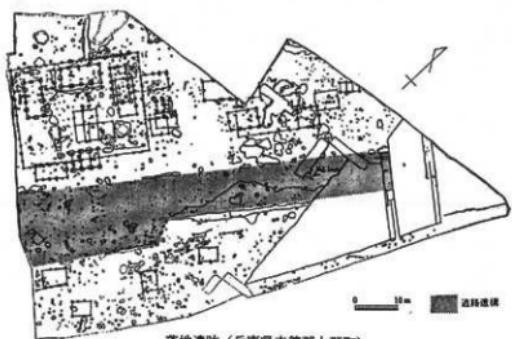
正義縣十二疋



山陽道と駅家



小犬丸遺跡（兵庫県尼崎市）



落成跡（兵庫県尼崎市上郡町）

図52. 駅家の関連資料

られてきた。また、これらの建物群は南半部（G・H区）と北半部（J区、96-2区）では異なった様相を示している。南部では梁行2間、桁行3間もしくは4間の屋と梁行、桁行とも2間の一般的な掘立柱建物2～3棟が一辺20～30mの範囲にまとまっていた。北部では桁行が5間を越える建物や、直径0.4～0.6mの柱材を用いた桁行3間の大形倉庫などが一定の空間を保ちながらも方向や柱筋をそろえるほか、空閑地を区画する溝も掘削されるなど、それぞれが計画的に配置された様子がうかがえる。とくに8世紀前半から中頃にかけては、建物の方向が13～17°東へ振る大型の建物が一群をなす。このうち、屋である掘立柱建物1・2は東側、縦柱の倉庫建物J1・J2は西側にまとまり、両者の間に位置する建物J7・J8は屋、倉庫の判別がつかない。この2棟は同方向で南北に並び、東辺をそろえて東側を意識した位置関係であったと推定できる。最大規模をもつ唯一の東西棟である掘立柱建物1を中心的な建物とした場合、3棟の建物はL字形に配した屋であることが想定でき、さらにはコ字形となっていた可能性もある。各建物間の距離をみると、建物J1～J2間5.4m(18尺)、J1～J7間19.5m(65尺)、J2～J8間18.0m(60尺)など、屋や倉が計画的に配置されていたことがうかがえる。このような建物の配置や、建物群の南側を溝で区画する状況は、これらが公的な施設であったことを想起させる。また、高槻市内で検出した300棟を越える律令期の掘立柱建物のうち、桁行6間以上の掘立柱建物は嶋上郡衙跡と郡家今城遺跡、新池遺跡などに検出例があり、官衙もしくはこれに関連する遺跡以外にはみられないこともこの傍証となろう。

高槻市内に存在したことが知られる公的施設としては郡衙、駅家、寺院があり、駅家以外の所在地は確定している。『統日本紀』には和銅四(711)年に大原駅が攝津国嶋上郡に置かれたと記され、やがて平安京遷都後に廃されたことが後世の文献資料から推定されてきた。山陽道が淀川を渡ることから、大原駅と河内国の楠葉駅はこの両岸に置かれ、両者は淀川渡河にかかる密接な位置関係があったと考えられる。そして、長岡京へ遷都後に山陽道が淀川を渡河せずに山麓を進むルートに変更されたために、大原駅の重要性が低下し、やがて廃されたのであろう。梶原南遺跡は山麓をはしる山陽道と淀川にはさまれた交通の要衝にあり、淀川東岸に置かれた楠葉駅の対岸に位置する。これまでに検出した建物群の配置状況や出土遺物からすれば、北半部が公的な施設、南半部がこれを支えた人々の集落と解され、その存続時期も奈良時代におさまっている。

以上のように遺跡の立地や存続時期、造構の配置状況などから駅家を置くのにふさわしい位置を占める梶原南遺跡は、大原駅の最有力な候補地とことができよう。(宮崎)

抄 錄

フリガナ	シマガミイセキグン
書名	嶋上遺跡群
副書名	
巻次	21
シリーズ名	高槻市文化財調査概要
シリーズ番号	23
編集者名	橋本久和 鎌ヶ江一郎 宮崎康雄 高橋公一 木曾 広 川村雪絵
編集機関	高槻市立埋蔵文化財調査センター
所在地	大阪府高槻市南平台五丁目21-1
発行年月日	1997年3月

フリガナ 所収遺跡名	シマガミイセキ 嶋上郡衙 44-B地区				
フリガナ 所在地	シマガミイセキ 大坂府高槻市郡家町346				
コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
市町村 遺跡番号	34° 51' 54"	135° 36' 15"	19960515 ~ 19960521	50.0 m ²	個人住宅 建設工事
27207 39					
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
嶋上郡衙	官衙	奈良・平安	土壙2基	弥生土器、須恵器	

フリガナ 所収遺跡名	シマガミイセキ 嶋上郡衙 48-K地区				
フリガナ 所在地	シマガミイセキ 大阪府高槻市川西町一丁目953-12				
コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
市町村 遺跡番号	34° 50' 52"	135° 36' 30"	19960522 ~ 19960524	4.0 m ²	個人住宅 建設工事
27207 39					
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
嶋上郡衙	官衙	奈良・平安			

フリガナ 所収遺跡名	シマガミイセキ 嶋上郡衙 84-B地区				
フリガナ 所在地	シマガミイセキ 大阪府高槻市今城町184-27				
コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
市町村 遺跡番号	34° 50' 39"	135° 36' 10"	19960527	5.0 m ²	個人住宅 建設工事
27207 39					
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
嶋上郡衙	官衙	奈良・平安			

フリガナ 所収遺跡名	河原ヶ原 嶋上郡街 48-D地区				
フリガナ 所 在 地	木村力 紗矢子 加賀江タチカイ 大阪府高槻市川西町一丁目954-2				
コード	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村 遺跡番号	34° 50' 52"	135° 36' 31"	19960610 ~ 19960619	5.0 m ²	個人住宅 建設工事
所収遺跡名 種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
嶋上郡街 官衙	奈良・平安		弥生土器		

フリガナ 所収遺跡名	河原ヶ原 嶋上郡街 85-I地区				
フリガナ 所 在 地	木村力 紗矢子 加賀江タチカイ 大阪府高槻市今城町187-12				
コード	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村 遺跡番号	34° 50' 38"	135° 36' 14"	19961016	5.0 m ²	個人住宅 建設工事
所収遺跡名 種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
嶋上郡街 官衙	奈良・平安				

フリガナ 所収遺跡名	河原ヶ原 嶋上郡街 48-F地区				
フリガナ 所 在 地	木村力 紗矢子 加賀江タチカイ 大阪府高槻市川西町一丁目956-6, 959-8				
コード	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村 遺跡番号	34° 50' 51"	135° 36' 30"	19960801 ~ 19960809	5.0 m ²	個人住宅 建設工事
所収遺跡名 種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
嶋上郡街 官衙	奈良・平安				

フリガナ 所収遺跡名	河原ヶ原 嶋上郡街 48-G地区				
フリガナ 所 在 地	木村力 紗矢子 加賀江タチカイ 大阪府高槻市川西町一丁目956-10, 959-12				
コード	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村 遺跡番号	34° 50' 52"	135° 36' 31"	19960708 ~ 19960711	3.0 m ²	個人住宅 建設工事
所収遺跡名 種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
嶋上郡街 官衙	奈良・平安				

フリガナ 所収遺跡名	河原町 嶋上郡衙 48-G地区				
フリガナ 所 在 地	村井7 筑紫ノカニシタケシタケウチ 大阪府高槻市川西町一丁目954-13				
コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号	34° 50' 52"	135° 36' 31"	19960812 ~ 19960823	4.5 m ²
27207	39				個人住宅 建設工事
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
嶋上郡衙	官衙	奈良・平安		弥生土器	

フリガナ 所収遺跡名	河原町 嶋上郡衙 67-N地区				
フリガナ 所 在 地	村井7 筑紫ノカニシタケシタケウチ 大阪府高槻市川西町一丁目1088-12				
コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号	34° 50' 43"	135° 36' 24"	19960902 ~ 19960906	9.0 m ²
27207	39				個人住宅 建設工事
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
嶋上郡衙	官衙	奈良・平安			

フリガナ 所収遺跡名	河原町 嶋上郡衙 15-G・H地区				
フリガナ 所 在 地	村井7 筑紫ノカニシタケシタケウチ 大阪府高槻市郡家本町314-1・4・10, 315-2の一部				
コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号	34° 51' 20"	135° 36' 19"	19960911 ~ 19961202	682.0 m ²
27207	39				給油所建設
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
嶋上郡衙	官衙	奈良・平安	堅穴住居1・掘立柱建 物2、土壤1	土師器、須恵器、白磁 瓦、石製品、鉄滓	

フリガナ 所収遺跡名	河原町 嶋上郡衙 75-O地区				
フリガナ 所 在 地	村井7 筑紫ノカニシタケシタケウチ 大阪府高槻市郡家新町163-33				
コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号	34° 50' 39"	135° 36' 17"	19961015	6.0 m ²
27207	39				個人住宅 建設工事
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
嶋上郡衙	官衙	奈良・平安			

フリガナ 所収遺跡名	ヒムロカツヨウ 氷室塚古墳(96-1)				
フリガナ 所 在 地	村野フサワシヒムロカツヨウ 大阪府高槻市氷室町二丁目371-1				
コード	北 緯	東 綏	調査期間	調査面積	調査原因
市町村 遺跡番号	34° 50' 45"	135° 35' 40"	19960826 ~ 19960830	3.0 m ²	個人住宅 建設工事
27207 39					
所収遺跡名	種別	時 代	主な 遺 構	主な 遺 物	特 記 事 項
氷室塚	古墳				

フリガナ 所収遺跡名	ケンサキシマチ 郡家本町(96-1)				
フリガナ 所 在 地	村野フサワシケンサキシマチ 大阪府高槻市郡家本町1566				
コード	北 緯	東 綏	調査期間	調査面積	調査原因
市町村 遺跡番号	34° 51' 10"	135° 36' 00"	19960722 ~ 19960731	56.5 m ²	駐車場建設工事
27207 42					
所収遺跡名	種別	時 代	主な 遺 構	主な 遺 物	特 記 事 項
郡家本町	集落	古墳~平安	溝、落ち込み	弥生土器、土師器、瓦	

フリガナ 所収遺跡名	ケンサキシマロ 郡家今城(96-1)				
フリガナ 所 在 地	村野フサワシヒムロカツヨウ 大阪府高槻市氷室町一丁目781-25				
コード	北 緯	東 綏	調査期間	調査面積	調査原因
市町村 遺跡番号	34° 50' 35"	135° 36' 50"	19960611	4.0 m ²	個人住宅 建設工事
27207 42					
所収遺跡名	種別	時 代	主な 遺 構	主な 遺 物	特 記 事 項
郡家今城	集落	奈良・平安			

フリガナ 所収遺跡名	ケンサキシマロ 郡家今城(96-2)				
フリガナ 所 在 地	村野フサワシケンサキシマチ 大阪府高槻市郡家新町60-4				
コード	北 緯	東 綏	調査期間	調査面積	調査原因
市町村 遺跡番号	34° 50' 40"	135° 36' 50"	19960715 ~ 19960719	24.0 m ²	個人住宅 建設工事
27207 42					
所収遺跡名	種別	時 代	主な 遺 構	主な 遺 物	特 記 事 項
郡家今城	集落	奈良・平安	土壤基3、溝2	土師器	

フリガナ 所収遺跡名	ノゾミ(アシ) 郡家今城 (96-3)				
フリガナ 所 在 地	村井(アシ)ヒロタケイチヨウ 大阪府高槻市水室町一丁目769-7+15				
コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
市町村 遺跡番号	34° 50' 35"	135° 35' 30"	19961204	4.0 m ²	個人住宅 建設工事
27207 42					
所収遺跡名 種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
郡家今城 集落	奈良・平安				

フリガナ 所収遺跡名	ノゾミ(アシ) 中城 (96-1)				
フリガナ 所 在 地	村井(アシ)キシシカツイチヨウ 大阪府高槻市北畠和台町313-7				
コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
市町村 遺跡番号	34° 49' 36"	135° 35' 22"	19960712	1.0 m ²	個人住宅 建設工事
27207 47					
所収遺跡名 種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
中城 集落	中世				

フリガナ 所収遺跡名	ノゾミ(アシ) 中城 (96-2)				
フリガナ 所 在 地	村井(アシ)キシシカツイチヨウ 大阪府高槻市北畠和台町313-6				
コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
市町村 遺跡番号	34° 49' 36"	135° 35' 22"	19960909 ~ 19960913	4.0 m ²	個人住宅 建設工事
27207 47					
所収遺跡名 種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
中城 集落	中世				

フリガナ 所収遺跡名	ノゾミ(アシ) 宮之川原 (96-1)				
フリガナ 所 在 地	村井(アシ)シヤクシカツイチヨウ 大阪府高槻市宮之川原五丁目505-41				
コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
市町村 遺跡番号	34° 51' 41"	135° 36' 08"	19961004	4.0 m ²	個人住宅 建設工事
27207					
所収遺跡名 種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
宮之川原 集落	古墳				

フリガナ 所収遺跡名	宮之川原 (96-2)				
フリガナ 所 在 地	大坂府高槻市宮之川原五丁目505-31				
コード	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村 遺跡番号	34° 51' 41"	135° 36' 08"	19970121	4.0 m ²	個人住宅 建設工事
27207					
所収遺跡名	種別	時 代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項
宮之川原	集落	古 墳		弥生土器	

フリガナ 所収遺跡名	大藏司 (96-1)				
フリガナ 所 在 地	大坂府高槻市蒲原一丁目279-2 の一部他				
コード	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村 遺跡番号	34° 51' 37"	135° 36' 10"	19960620 ~ 19960628	4.0 m ²	個人住宅 建設工事
27207					
所収遺跡名	種別	時 代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項
大藏司	集落	弥生～中世			

フリガナ 所収遺跡名	高槻城 (96-1)				
フリガナ 所 在 地	大坂府高槻市出丸町970-1				
コード	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村 遺跡番号	34° 50' 20"	135° 37' 15"	19960701 ~ 19960705	4.0 m ²	個人住宅 建設工事
27207	85				
所収遺跡名	種別	時 代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項
高槻城	城跡	中世・近世			

フリガナ 所収遺跡名	高槻城 (96-2)				
フリガナ 所 在 地	大坂府高槻市出丸町964-14				
コード	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村 遺跡番号	34° 50' 20"	135° 37' 15"	19970127 ~ 19970129	5.0 m ²	個人住宅 建設工事
27207	85				
所収遺跡名	種別	時 代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項
高槻城	城跡	中世・近世			

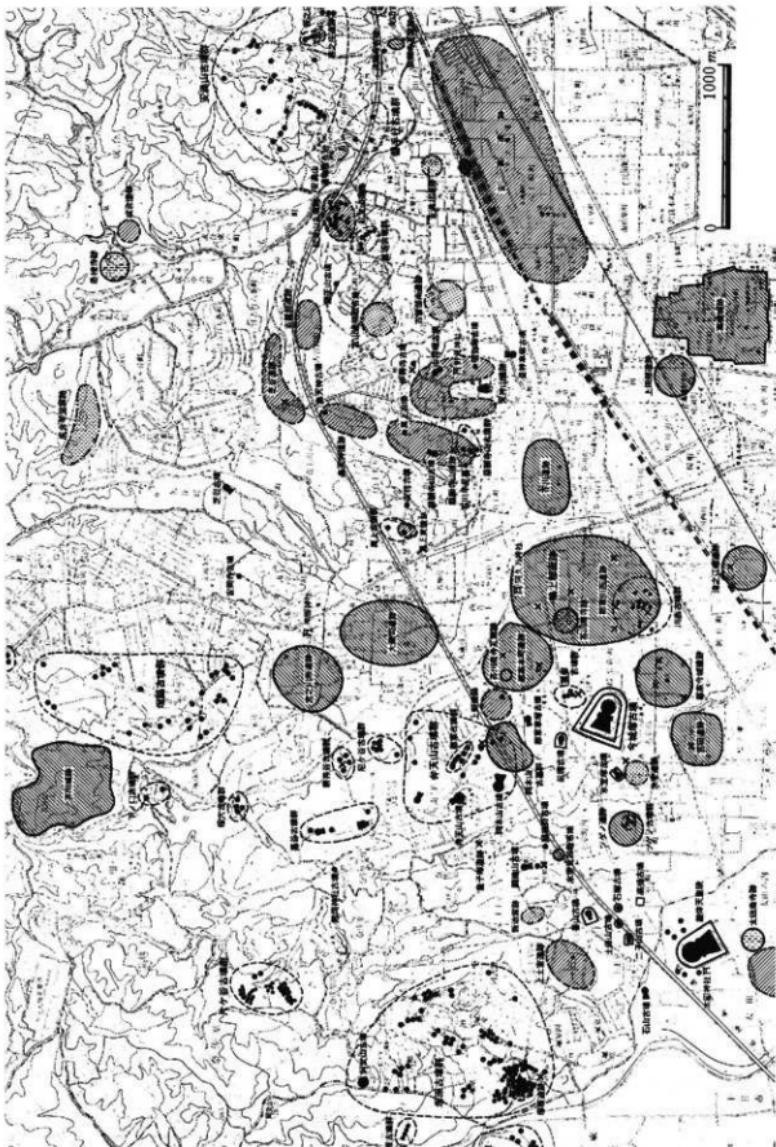
フリガナ 所収遺跡名	7.7 安満 (96-1)				
フリガナ 所 在 地	材料地: 外城山アマゾナイト 大阪府高槻市安満新町376-6				
コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村 27207	遺跡番号 83	34° 51' 19"	135° 37' 48" ~ 19960919	10.0 m ²	個人住宅 建設工事
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
安満	集落	弥生			

フリガナ 所収遺跡名	カツラテ 梶原寺 (96-1)				
フリガナ 所 在 地	材料地: 外城山 カツラテ 大阪府高槻市梶原一丁目1137				
コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村 27207	遺跡番号 104	34° 51' 45"	135° 39' 10" ~ 19960613 19960701	50.0 m ²	社務所 建設工事
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
梶原寺	寺院	奈良・平安	溝・土坑	土師器・瓦	震災復旧

フリガナ 所収遺跡名	カツラジバ 梶原南 (96-1)				
フリガナ 所 在 地	材料地: 外城山 カツラジバ 大阪府高槻市梶原四丁目5-2				
コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村 27207	遺跡番号 106	34° 51' 38"	135° 39' 30" ~ 19960906	20.0 m ²	倉庫建設工事
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
梶原南	集落	弥生～中世			

フリガナ 所収遺跡名	カツラジバ 梶原南 (96-2)				
フリガナ 所 在 地	材料地: 外城山 カツラジバ 大阪府高槻市梶原四丁目664-1, 668-12, 1299				
コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村 27207	遺跡番号 106	34° 51' 38"	135° 39' 30" ~ 19960926 19961031	553.0 m ²	駐車場建設工事
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
梶原南	集落	弥生・中世	堅穴住居1基、掘立柱 建物3棟、井戸2基、方形 馬溝墓2基、土坑6基	弥生土器、土師器、須 恵器、瓦器、木製品	

図 版



島上部街跡とその周辺



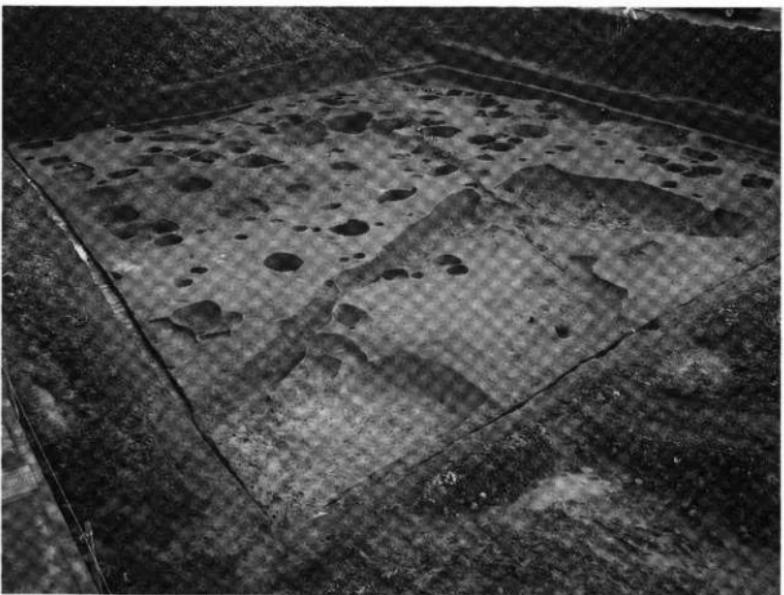
a. 島上郡衙跡 44-B 地区 調査区全景（北側から）



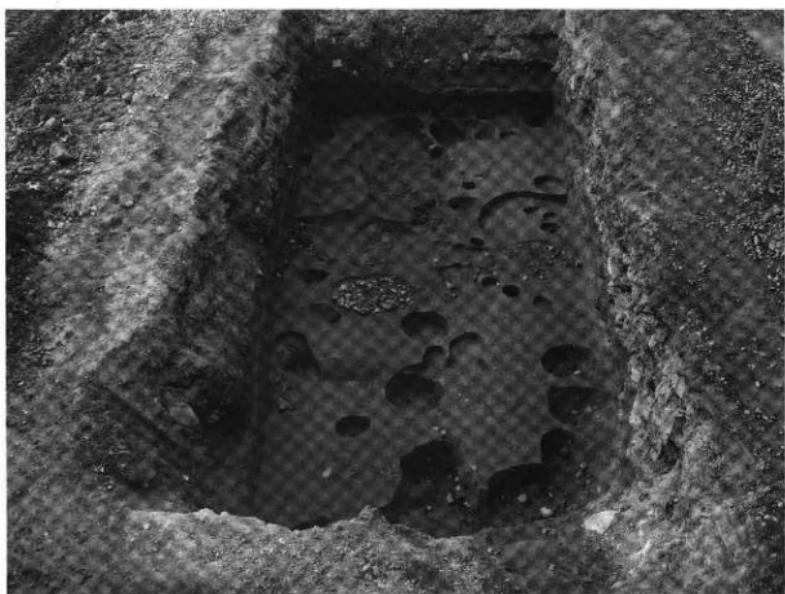
b. 島上郡衙跡 44-B 地区 調査区全景（南側から）



a. 島上郡衙跡（15-G・H地区） A区東半部（東側から）



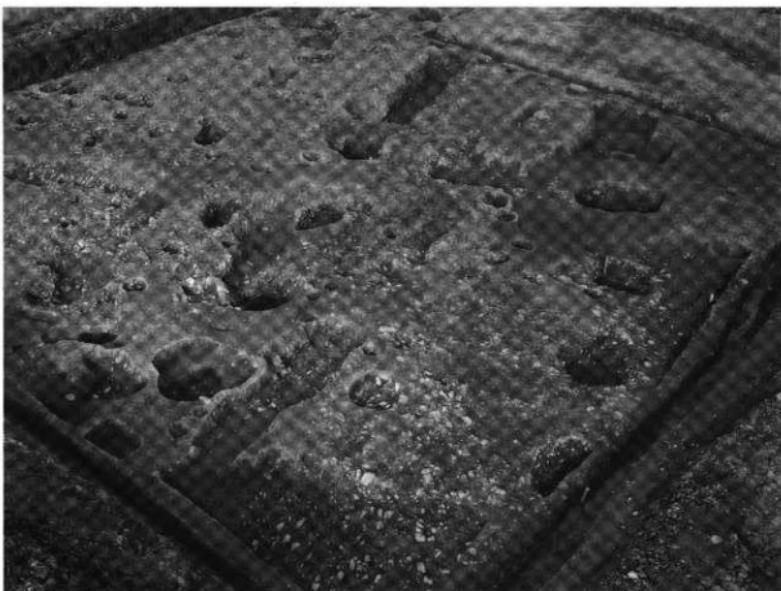
b. 島上郡衙跡（15-G・H地区） A区西半部（北西侧から）



a. 岬上郡面跡（15-G・H地区） B区全景（東側から）



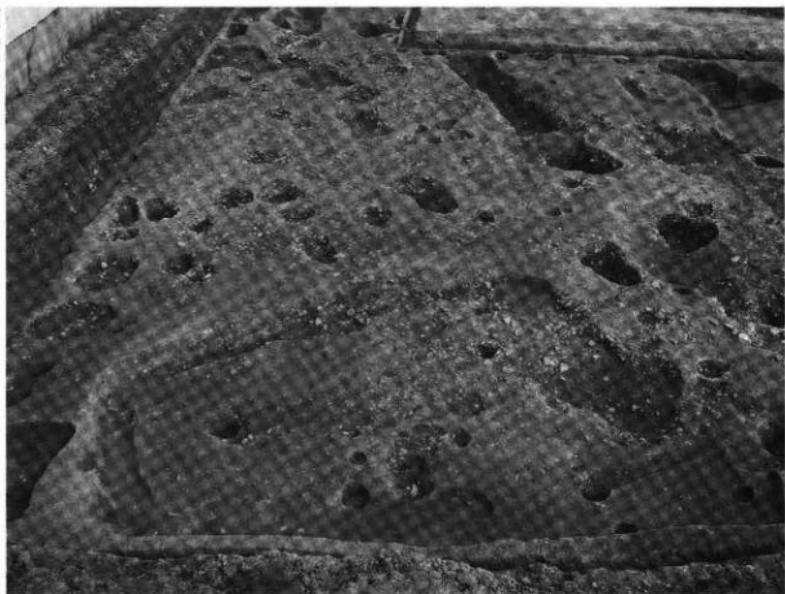
b. 岬上郡面跡（15-G・H地区） B区全景（西側から）



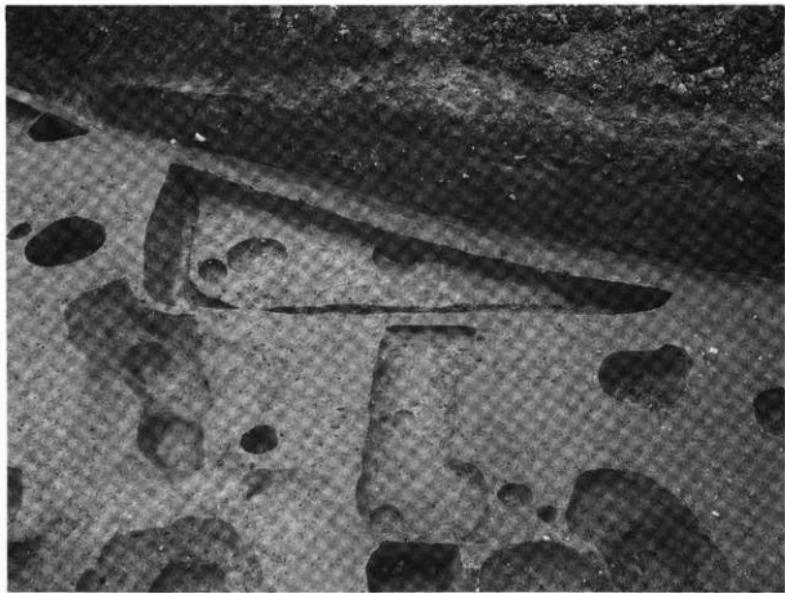
a. 島上郡衙跡（15-G・H地区） 建物1（西側から）



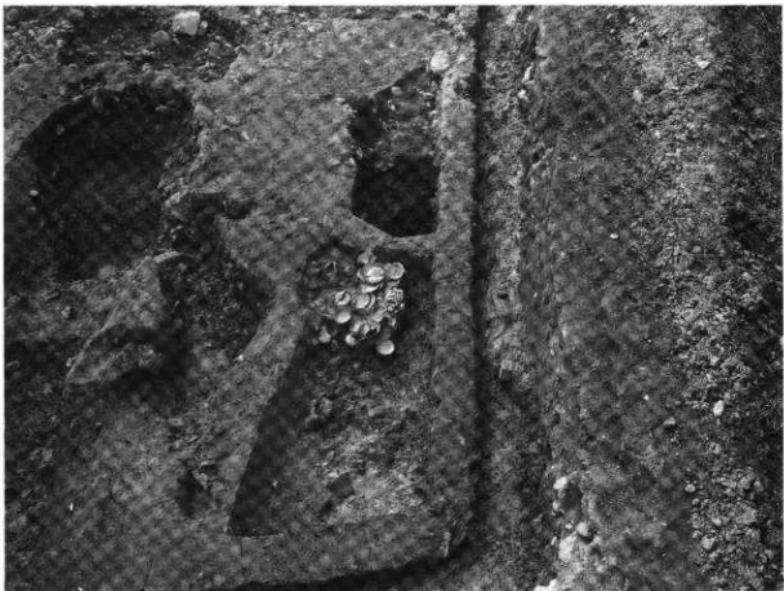
b. 島上郡衙跡（15-G・H地区） 建物2（南側から）



a. 岐阜郡街跡（15-G・H地区） 住居1 東半部（西側から）



b. 岐阜郡街跡（15-G・H地区） 住居1 西半部（東側から）



a. 嶋上郡衙跡（15-G・H地区） 土壙墓1（東側から）



b. 嶋上郡衙跡（15-G・H地区） 土壙墓1 土器出土状況（南側から）



縄上部断跡 (15-G・H地区) 落ち込み I (3~8・10~13・20)



14



15



16



17



18



19

崎上郡衙跡 (15-G・H地区) 落ち込み1 (14~17・18) 住居1 (1・2)



29



29'



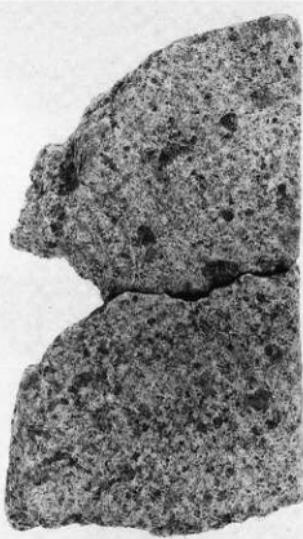
36

a. 島上郡衙跡 (15-G・H地区) 溝状造様 (29)

b. 島上郡衙跡 (15-G・H地区) 包含層 (36)



21



21'

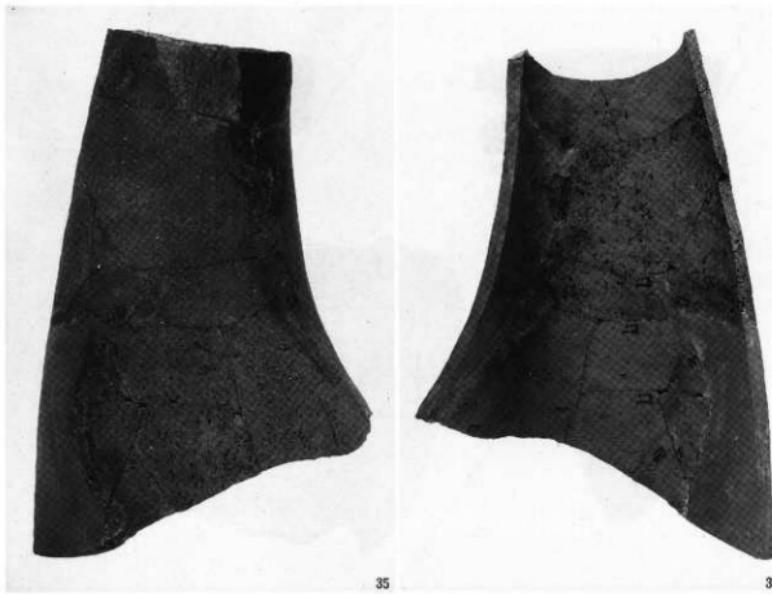


21'

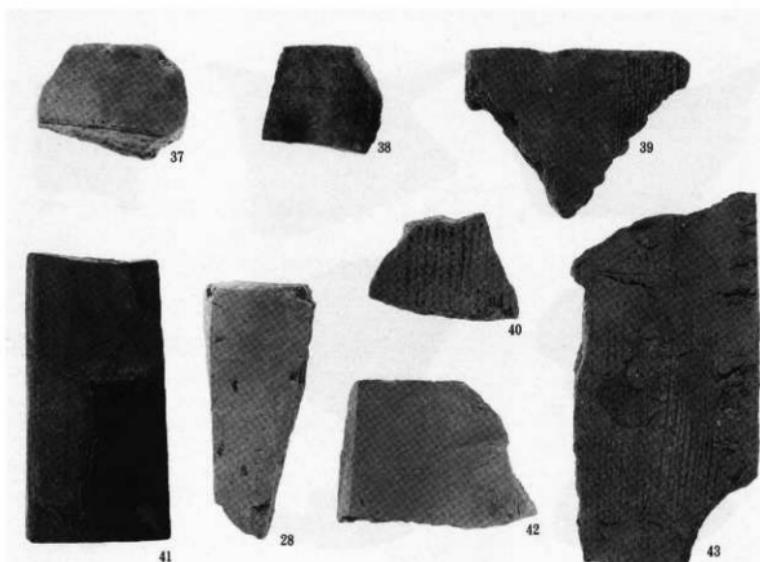
c. 島上郡衙跡 (15-G・H地区) 落ち込み 1 (21)



21'



a. 岬上部断面(15-G・H地区) 包含層(35)



b. 岬上部断面(15-G・H地区) 溝状遺構(28) 包含層(37~43)

約1/3



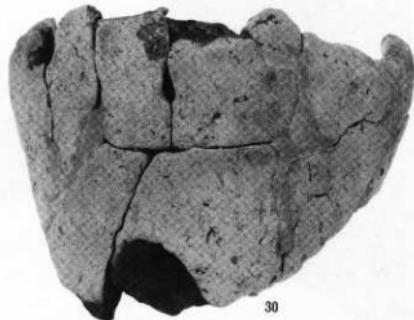
23



24



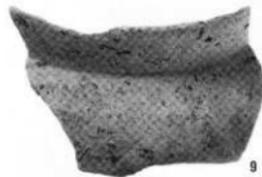
25



30

a. 岐上郡衙跡 (15-G・H地区) 土壌基1 (23・24) 溝状遺構 (25) Pit10(30)

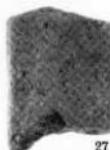
約1/2



9



33



27



32



8



26



31

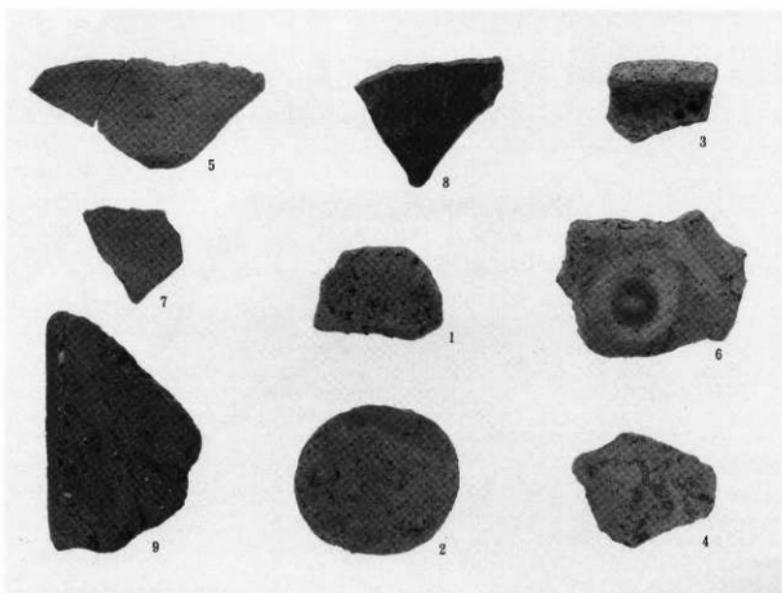


22

b. 岐上郡衙跡 (15-G・H地区) 落ち込み1 (9・18・22) 溝状遺構 (26・27) 包含層 (32~34) Pit27(31) 約1/2



a. 郡家本町遺跡（96-1） 全景（北側から）



b. 郡家本町遺跡（96-1） 出土遺物（1～9）

約1/2